

シラバス

シラバスの掲載ページは、P9～10の
開設科目一覧にある各授業科目の「シラ
バス頁」を参照してください。

基礎科目

基本科目

(両専攻共通)

科目名	人間学総論		副題			
担当者	生田 久美子・米山 光儀（オムニバス・一部共同）					
開講期	前期	単位数	2単位	配当年次	1年次	
授業の概要	本講義では、なぜヒトは「ヒューマン」（人間の「人間らしさ」を備えた存在）になれたのかをたどり、そこから、人間に備わる「社会性」という本性と「教育」の起源と展開を見てゆく。次に、人間の本性として備えた特性を、一貫性、効用性（最適性）、相互性（開放性）、審美性の4つの側面に焦点を当てる。そして教育において子どもを「人間としてみる」ということについて、教育と「人間観」との関係や「人間」研究の在り方について、受講生間の相互的な議論をとして吟味する。					
授業のねらい・到達目標	1．「人間」とは何かを探究する。 2．人間が「人間である」ということの特長を押さえ、「人間であること」の意味を理解する。 3．「人間学」を踏まえた教育の在り方、人間研究の在り方を探究する。					
授業の方法・授業計画						
1	人間の進化（1）―なぜヒトはヒューマンになれたか					
2	人間の進化（2）―「社会性」の起源					
3	人間の進化（3）―「言語」の発生と進化					
4	人間の進化（4）―「教育する」ということ（「アマラとカマラ」説再考）					
5	子どもを「人間としてみる」ということ（1）―教育と「人間観」					
6	子どもを「人間としてみる」ということ（2）―「教える」ことの意味					
7	子どもを「人間としてみる」ということから何が見えてくるか					
8	「人間モデルの教育」（1）―教育はどう定義できるか					
9	「人間モデルの教育」（2）―教育のモデルをめぐって					
10	「人間モデルの教育」（3）―その現代的意義					
11	教育における「善さ」					
12	実在主義的思考法と唯名主義的思考法					
13	「善さ」の構造					
14	「人は善くなろうとしている」とはどういうことか？					
15	まとめ―「人間学」とは何か					
期末						
授業に関する連絡	本授業は講義と演習の両形式で行う。演習では、履修生にレジュメ作成、グループ・ディスカッションなどで積極的参加を求める。					
評価方法及び評価基準	授業内で提出する数回のレポート（60%）・発表等（40%）を基にして総合評価する。					
事前・事後学習の内容	予習をしてから授業に臨むこと。また、授業後には授業内容の振り返りを十分にして次回の授業の準備をすること。					
履修上の注意	問題意識をもって、授業内の議論に積極的に参加すること。					
テキスト	佐伯胖他 『子どもを「人間としてみる」ということ』、ミネルヴァ書房、2013年					
参考文献	NHKスペシャル取材班 『ヒューマン なぜヒトは人間になれたのか』、角川書店、2012年 村井実 『善さの構造』講談社学術文庫					

科 目 名	人間学概論Ⅰ(哲学と人間)		副題		
担 当 者	尾崎 博美				
開 講 期	前期	単位数	2単位	配当年次	1・2年次
授業の概要	人間が教育を受けるとは何を意味するのであろうか。教育を人間が「人間性」を獲得していくもっとも広い意味で捉えるとき、改めて人間の「生活」「知性」「感情」「経験」といったキーワードが問いの対象として浮かび上がってくる。本授業では、「人間とは何か」を哲学的に問うなかで特に「生活」概念に焦点を当て、歴史、実践、現在の社会の特徴を踏まえながら、多角的に議論を行っていく。 今年度は、ジェーン・ローランド・マーティン著の『私たちの学校は「良い生活」だった』(原題:School Was Our Life)を輪読し、「生活」(Life/Living)を通して人間が育つ・成長するとはどのようなことなのか、広い意味での「教える-学ぶ」場面に即して検討していく。 講義の序盤では、「哲学」領域での「生活」「経験」を問う議論への理解を深めるため、ジョン・デューイらの教育思想を辿ることから始める。講義の中盤では、テキストの輪読及び「生活」に関連する学校教育や地域教育の実践事例を通して、「教育」の基盤となる「哲学」の問いや視点を考察していく。 講義の終盤では、「哲学」と「教育」「生活」の其々の分野での理論および実践研究の成果を総合的に検討し、あらためて人間性や専門的な「技術」や「知識」を育む、「良い生活」(Good Life/Living)という営みがもつ可能性について考察する。				
授業のねらい・到達目標	1. 人間の本質的な営みとしての「生活」について理解を深める。 2. 「哲学」の領域での「生活」「経験」に関する議論を理解する。 3. 「教育」「人間」において「良い生活」がどのような実践として捉えられているかを理解する。 4. 「子ども人間学」における「良い生活」論の意義について理解する。				
授業の方法・授業計画					
1	イントロダクションー「人間」と「生活」				
2	「人間」を問う視点としての「生活」ー「経験」とは何か？				
3	「人間」を問う視点としての「生活」ー「成長」とは何か？				
4	「人間」を問う視点としての「生活」ー「知性」とは何か？				
5	J.R. マーティン『私たちの学校は「良い生活」だった』①				
6	J.R. マーティン『私たちの学校は「良い生活」だった』②				
7	J.R. マーティン『私たちの学校は「良い生活」だった』③				
8	J.R. マーティン『私たちの学校は「良い生活」だった』④				
9	J.R. マーティン『私たちの学校は「良い生活」だった』⑤				
10	J.R. マーティン『私たちの学校は「良い生活」だった』⑥				
11	人間性や専門的な「技術」や「知識」を育む「生活」の特徴				
12	「事例」研究①子ども 修士生の実践例の検討				
13	「事例」研究②子ども 修士生の実践例の検討				
14	「事例」研究③子ども 修士生の実践例の検討				
15	総括：人間にとって「良い生活」とは何か？				
期末	試験なし				
授業に関する連絡	本授業では前半は主に講義形式、後半は演習形式での授業を行う。演習では、履修生にレジュメ作成の担当を課する。				
評価方法及び評価基準	最終レポート(40%)、授業内で提出する小レポート(30%)、発表(30%)に基づいて評価する。				
事前・事後学習の内容	予習をして授業に臨むこと。また、授業後は授業の振り返りを十分にしておいて次回の授業の準備をすること。				
履修上の注意	問題意識をもって、授業内の議論に積極的に参加すること。				
テキスト	J.R. マーティン著、生田久美子監訳、尾崎博美・犬塚典子・畠山大・八木美保子・今井卓実訳、『私たちの学校は「良い生活」(グッド・ライフ)だった』慶應義塾大学出版会、2021年。 (なお、授業で使用する箇所をコピーしたものを配布する。)				
参考文献	J.R. マーティン著、生田久美子監訳・朴順南他訳『スクールホーム<ケア>する学校』東京大学出版会、2007年。 J.R. マーティン著、生田久美子監訳・尾崎博美他訳『カルチュラル・ミスエデュケーションー「文化遺産の伝達」とは何なのか』東北大学出版会、2008年。 ジョン・デューイ著、上野正道他訳『明日の学校(デューイ著作集7)』東京大学出版会、2019年。 ジョン・デューイ著、宮原誠一訳『学校と社会』岩波書店、1957年。 レイヴ&ウェンガー著、佐伯胖訳『正統的周辺参加一状況に埋め込まれた学習』産業図書出版、1993年。				

科目名	人間学概論Ⅱ（文学と人間）		副題		
担当者	安藤 公美				
開講期	後期	単位数	2単位	配当年次	1・2年次
授業の概要	文学は、様々な事象を言語化したテキストだが、なかでも人間の発する声なき声や、社会が生んだ答えなき難問をすくい取るのに優れている。表現の巧みさを感じるとともに、それを生み育んだ時代精神や人間心理を知る、格好のテキストといえる。本講座では、芥川龍之介の作品を軸に、自己と他者、生き難い時代のユートピア創出、社会的存在としての人間という観点から文学を読み進める。講読を通し、文学表現や創作技法、また言葉や他者とともにある人間研究として理解を深める。 文学研究の方法も現代では多様化している。芸術論、人間論、心理学、時代や文化的視点からの考察に加え、環境に即したエコクリティシズムや、〈ケア〉をキーワードとする他者との関係性、地域社会と文化的事象の共有化なども必須の観点となっている。方法論の構築とあわせて自らのテーマに即した読みの実践を行うことを通し、社会と人間と文学の関係に新たな価値創造を可能とする視点を獲得していく。 また、文学と土地のもつ文化性を結ぶ実践的体験として文学散歩（鎌倉）を予定している。				
授業のねらい・到達目標	1. 文学講読・研究を実践し、研究の視点や方法論を理解、獲得できる。 2. 時代精神と人間心理の関係について把握し、自己と他者の関係を多角的に理解できる。 3. 文学散歩の実践を通し、地域と文化事象を結びつけ、考える方法を知る。				
授業の方法・授業計画					
1	ガイダンス 文学と心理・子ども・ケア・環境				
2	作品講読1 童話「蜘蛛の糸」解釈と討議				
3	人間性のアポリア 生命の優先性をめぐる他者と自己の関係				
4	世界に遍在する物語 お伽噺・民話・宗教説話・文学のなかの人間				
5	作品講読2 「杜子春」と「杜子春伝」解釈と討議				
6	物語の構造パターンとルーツから探る人間				
7	生き難い時代を生きる 文学者によるユートピア創出				
8	作品講読3 「藪の中」解釈と討議				
9	ミステリか不条理文学か 答えのない小説を解く				
10	1920年代と現代 死・恋愛・真相をめぐるメディアと文学				
11	映画《羅生門》（黒澤明監督）鑑賞と研究 白黒・演技・結末のカタルシス				
12	文学散歩の準備1 文学と都市・トポス・観光 ※休日等に振り替えて行う				
13	文学散歩の準備2 作家の生きた場所 ※休日等に振り替えて行う				
14	文学散歩 鎌倉 ※場所は変更する場合がある ※休日等に振り替えて行う				
15	まとめ・〈文学〉と〈人間〉の輪郭を拓げる思考 レポート提出				
期末					
授業に関する連絡	授業は、講義を主とし、適宜発言や課題を求める				
評価方法及び評価基準	講読や討議への積極性 参加意欲：50％ 課題レポート：50％				
事前・事後学習の内容	事前：現代の文学状況を広く知る 配布資料を読み、自分の考えをまとめる 事後：文学、資料を精読し、情報の整理を行う テーマを発展的に設定する				
履修上の注意	講座では積極的な参加姿勢が望ましい。また、文学散歩を行うため、体調管理に留意し、関心をもって臨めるようにする。				
テキスト	特になし。必要に応じてプリント配布。				
参考文献	小川洋子『物語の役割』ちくまプリマー新書、2007 小川公代『ケアの倫理とエンパワメント』講談社、2021 小谷一明『文学から環境を考える エコクリティシズムガイドブック』勉誠出版、2014 安藤公美『芥川龍之介 絵画 開化 映画 都市』翰林書房、2006				

科 目 名	人間学概論Ⅲ（政治と人間）		副題		
担 当 者	藤森 智子・國見 真理子（オムニバス・一部共同）				
開 講 期	前期	単位数	2 単位	配当年次	1 ・ 2 年次
授業の概要	社会は個々の人間から形成され、社会科学の一つである政治学は広く人間の営みを扱うといえよう。本来、政治とは利害の調整の過程であるといわれる。本講座は、国家や社会の統治や政策が人間形成に与える影響の検討を主な目的とする。 初回講義は、藤森と國見が共同で、政治の観点を中心に、国家と人間に関わる関係を概観する。藤森担当の講義では、マクロな視点では国家の統治・政策を取り上げ検討する。ミクロな視点では個々の政策と人間形成を取り上げ、ケース・スタディを行う。國見担当の講義では、国家と人間との関わりを経済、法律面から取り上げ、ケース・スタディを行う。				
授業のねらい・到達目標	1．国家に関わる社会科学のアプローチを理解する。 2．国家と人間形成の諸相を明らかにする。 3．国家に関わる多様な問題分析の方法を確立する。				
授業の方法・授業計画					
1	ガイダンス/研究課題の設定(藤森・國見)				
2	近代社会と人間(藤森)				
3	国家権力と人間(藤森)				
4	民主主義と人間(藤森)				
5	国家とナショナリズム(藤森)				
6	言語政策と人間①：近代日本を例に(藤森)				
7	言語政策と人間②：日本の植民地を例に(藤森)				
8	受講生の発表と討論(藤森)				
9	統治と人間（國見）				
10	国家権力を巡る諸問題①：行政国家現象（國見）				
11	国家権力を巡る諸問題②：財政問題を例に（國見）				
12	国家権力を巡る諸問題③：裁判員制度を例に（國見）				
13	事例検討①：統治を巡る判例検討（國見）				
14	事例検討②：人間を巡る判例検討（國見）				
15	総括（國見）				
期末					
授業に関する連絡	「でんでんばん」を通じて履修者に適宜連絡する。				
評価方法及び評価基準	授業内の発表・討論(50%)及び期末課題(50%)で評価する。				
事前・事後学習の内容	授業計画で授業内容を確認し、該当部分の下調べをしてから授業に出席してほしい。授業後は、十分な復習を行い、知識の定着をはかるよう努めてほしい。				
履修上の注意	特になし。				
テキスト	特になし。				
参考文献	佐藤幸治「日本国憲法論」（成文堂） 別冊ジュリスト『憲法判例百選Ⅰ・Ⅱ』（有斐閣）				

科 目 名	人間学概論Ⅳ（芸術と人間）		副題		
担 当 者	安村 清美・三政 洋一（オムニバス）				
開 講 期	後期	単位数	2 単位	配当年次	1 ・ 2 年次
授業の概要	本講義は、人間の芸術活動がいかに「人間」を人間たらしめてきたか（いるか）について、歴史的、実践的な観点から探究することを目的とする。特に、人間存在そのものである身体を対象とする舞踊学、美術解剖学領域の研究を通して、時空間における芸術の表現と伝達の関係性を考察し「人間の芸術性」及び「芸術の人間性」について検討していく。 安村担当の講義では、「人はなぜ踊るのか、舞踊はなぜ人間社会に存在し続けているのか」という問いについて、歴史と地域の中で生成され創造・伝承されてきた舞踊を概観し、さらに、舞踊各ジャンル固有の芸術領域としての特殊性とその存在の意味について、芸術の表現と伝達の関係性から探究する。 また三政担当の講義では、人を主題とする様々な美術作品について、人体解剖学を基にその表現の特徴について考察していく。人間は太古から現在に至るまで人の姿・形を平面や立体にして表してきたが、殊に彫刻の分野においては歴史上、人の形を基に表した作品が主流である。人体の構造を概観しながら古今東西の美術作品、特に彫刻作品を中心にみつめて人間の芸術表現について探求していく。				
授業のねらい・到達目標	人間の芸術活動について舞踊、美術解剖学を中心に理解を深めていくことがねらいであり、次の到達目標を設定する。 1. 舞踊について ①伝承文化及び比較文化の観点から海外、日本の舞踊について理解する。 ②演じられた人間像としての芸術舞踊であるバレエについて理解する。 ③舞踊芸術の表現と伝達性について、歴史と地域の中で生成され選択されてきた意味について考察する。 2. 美術解剖学について ①人体の基本的な構造について理解する。 ②ギリシア時代の彫刻からミケランジェロ、ロダンなど西洋における彫刻家の作品を見つめ、その思想、造形上の特徴について理解する。 ③近・現代における様々な美術作品を観ていくこと人間の為す形について考えを深める。				
授業の方法・授業計画					
1	舞踊文化の概観―歴史と地域の中で生成され伝承されてきた舞踊①海外（安村）				
2	舞踊文化の概観―歴史と地域の中で生成され伝承されてきた舞踊②日本（安村）				
3	伝承文化としての舞踊の比較検討（安村）				
4	芸術としての舞踊―演じられ語られた人間像①バレエ（安村）				
5	芸術としての舞踊―演じられ語られた人間像②バレエ以降（安村）				
6	芸術としての舞踊―演じられ語られた人間像③現代（安村）				
7	舞踊芸術の表現と伝達の関係性―身体と舞踊の今日的課題（安村）				
8	「人はなぜ踊るのか」という問いについての再考（安村）				
9	美術解剖学概観―人間による人体の追求について考える(三政)				
10	造形芸術に見る人体の法則―プロポーション、バランス、リズム(三政)				
11	頭部の構造①(三政)				
12	胴体の構造②―胸部・腹部・腰部(三政)				
13	上肢の構造③―前腕・上腕・手(三政)				
14	下肢の構造④―大腿・下腿・足(三政)				
15	造形芸術における人間像(三政)				
期末					
授業に関する連絡	本授業では内容に応じ講義形式、演習形式で授業を行う。演習では、履修生に課題を課することがある。				
評価方法及び評価基準	レポート(50%)、および発表(50%)に基づいて総合的に判断する。				
事前・事後学習の内容	事前学習：シラバスを確認し、授業に関わる内容について予習すること。事後学習：学習した内容について各種文献等を用いて検討し、理解を深めること。				
履修上の注意	芸術に関心を持ち、意欲的に授業に臨むこと。				
テキスト	授業時に紹介する。 授業時にプリントを配布する。				
参考文献	「考える身体」三浦雅士、1999、NTT出版 「アーティストのための美術解剖学」ヴァレリー・L・ウインスロウ、2013、マール社				

科 目 名	人間学概論Ⅴ（自然と人間）		副題		
担 当 者	仙田 考				
開 講 期	前期	単位数	2 単位	配当年次	1 ・ 2 年次
授業の概要	本講義では、「自然」と「人間」の両者に関連させながら、「自然と人間の関わり」及び「自然体験」をテーマにして、理論と実践の両側面から考察する。 自然がなぜ人間にとって必要な存在であるのか、子ども・自然とのふれあい体験・生活環境・栽培・食環境・癒し・アート・エシカル・まち・気候変動等の視点から、理論と実践を通して考察する。また地球温暖化の抑制、持続可能な社会づくりに向けて、私たちがなにができるのか、SDGs、ESD、生物多様性保全、自然と人間の共生等の視点も含め、自然と人間の関わりについて探っていく。 学外授業においては、自然環境・施設への訪問を通して、自然の中で仲間とともに自然を感じ、自然と里山、「自然」と人間との関係について考察する。 最終回の共同授業では、それまでの14回の授業をふり返り、総まとめをおこなったうえで、将来の「自然」と「人間」との課題をともに考えてみたい。				
授業のねらい・到達目標	1. 自然と人間の深い関わりについて理解する。 2. 自然が人間形成に与える影響について理解する。 3. 学外授業を通して、「自然」と「人間」との関係を過去と現在までを鳥瞰し、今後の関係を理解する。				
授業の方法・授業計画					
1	「自然」はなぜ人間にとって必要か				
2	子どもと自然				
3	生活環境と自然				
4	食環境と自然				
5	栽培と自然				
6	自然のもつ癒しの力				
7	身近な自然にふれてみよう、感じてみよう				
8	自然とあそび、アート				
9	エシカルと自然				
10	まちと自然				
11	気候変動と生活、環境				
12	自然環境、関連施設等の視察（1）				
13	自然環境、関連施設等の視察（2）				
14	自然環境、関連施設等の視察（3）				
15	まとめ及び今後の自然と人間の課題を考える				
期末					
授業に関する連絡	本授業では講義や演習、さらには学外授業を取り入れて行う。				
評価方法及び評価基準	授業での発表・課題（50%）及びレポート（50%）を総合的に判断し評価する。				
事前・事後学習の内容	予習をしてから授業に臨むこと。また、授業後に反復学習をすること。安全な学外学習を行うための準備をすること。				
履修上の注意	自然と人間形成の関係、自然保護に問題意識をもって、本授業に臨み、主体的・積極的に議論に参加すること。学外授業（自然環境、関連施設等の視察）では、事前から健康に留意し、体力をつけておくこと。				
テキスト	特になし				
参考文献	リチャード・ループ『あなたの子どもには自然が足りない』早川書房、2006 宮崎良文『森林浴 心と体を癒す自然セラピー』創元社、2018 フローレンス・ウィリアムズ『NATURE FIX 自然が最高の脳をつくる』NHK出版、2017 ほか授業内で紹介				

科目名	人間学研究法		副題		
担当者	犬塚 典子・渡邊 由己（オムニバス）				
開講期	前期	単位数	2単位	配当年次	1年次
授業の概要	人間学研究に必要とされる学術的な思考の基礎を培うとともに、データ収集の技法や各種の方法論的アプローチ、さらには修士論文作成の手法について理解を深める。 初回の授業オリエンテーションの後、渡邊担当の7回は、実証的研究（量的研究）の理論と実際を学ぶ。また、なぜ方法論的に対立する量的、質的研究者がともに人間学研究を発展させて来たのかについて、存在論、認識論のリフレクションから考察する。犬塚担当の7回は、大学院教育の歴史、学術の動向、質的研究に関する知識と技法を学ぶ。関連領域の基礎的な論文を読み、先行研究の検討、文献リストの作成、概念・言葉の定義、論点・議論の整理法などを身につける。まとめとして、K J法、セブン・クロス法のワークショップを行い、修士論文のアウトライン作成を試みる。最後に、著作権、研究倫理について学習し研究倫理e-learningを受講する。				
授業のねらい・到達目標	1. 量的研究方法および質的研究方法について基本的な理解を深める。 2. 各自の研究テーマにおけるリサーチクエストと合致した研究方法を見出す。				
授業の方法・授業計画					
1	授業オリエンテーション（犬塚・渡邊）				
2	現象を数量化するとは（渡邊）				
3	実証的研究①観察法（渡邊）				
4	実証的研究②実験法（渡邊）				
5	実証的研究③質問紙調査法（渡邊）				
6	実証的研究④テスト法（渡邊）				
7	実証的研究⑤メタ分析（渡邊）				
8	横断的研究と縦断的研究（渡邊）				
9	大学院教育における学位論文とコースワーク（犬塚）				
10	学術の動向を知る：先行研究レビュー（犬塚）				
11	量的研究と質的研究（犬塚）				
12	概念の定義、歴史的な位置づけ、具体と抽象、モデル化（犬塚）				
13	論文に使われる表現（犬塚）				
14	情報をどう整理するか：K J法とセブン・クロス・ワークショップ（犬塚）				
15	著作権、書誌事項、研究倫理審査（犬塚）				
期末					
授業に関する連絡	院生メールアドレスを通じて行う。				
評価方法及び評価基準	各回に与える課題・レポート（50%）、及び発表（50%）を中心に評価する。				
事前・事後学習の内容	資料の読み込み、データの収集および分析が事前・事後共に課せられるので十分な準備の上、出席すること				
履修上の注意	リーディングアサイメントは授業初日に提示する。				
テキスト	野村康 2017 「社会科学の考え方」 名古屋大学出版会 9784815808761				
参考文献	「創造の方法学」高根正昭 講談社 2014 「動きながら識る、関わりながら考える」伊藤哲司・能智正博・田中智子著 ナカニシヤ出版				

専門科目

(子ども人間学専攻)

科 目 名	学び学特論		副題		
担 当 者	生田久美子				
開 講 期	後期	単位数	2 単位	配当年次	1 ・ 2 年次
授業の概要	「学ぶ」ということと、「知る」ということ、また「理解する」ということは同義であるか？違いがあるとするならば、それらはどのような関係にあるのか？本講義では、哲学、認知科学（心理学を含む）の学問領域における「学び論」の系譜を辿りながら、新しく生まれ変わり、発展してきている人間学の一領域としての「学び論」に焦点をあてて考察する。最終的に、人間学的観点から発展させた「学び論」を提示する。				
授業のねらい・到達目標	1・「学ぶ」ということと「知る」ということの違いを理解する。 2・哲学及び認知科学の領域での「学び」分析の系譜を理解する。 3・人間学的観点からの「学び論」の考え方を自らが生成・吟味し成果を発表する。				
授業の方法・授業計画					
1	「学び」と「情報の獲得」との違い				
2	「学び」と「知る」や「知識」との違いへの注目				
3	生活の中での「学び」/学校での学び				
4	「わかる」ということの意味を考える				
5	「わかり方」の探究（1）－「わかる」とは何か				
6	「わかり方」の探求（2）－子どもはわかろうとしている				
7	「わかり方」の探求（3）－「わかる」から「なっとく」へ				
8	「わかり方」の探求（4）－何のためにわかるのか				
9	「わかり方」の探求（5）－子どもはみなわかろうとしている				
10	特別講義①正統的周辺参加論（佐伯胖）				
11	特別講義②「二人称的関わり」とは何か（佐伯胖）				
12	特別講義③「遊び」と「学び」（佐伯胖）				
13	事例検討・発表①				
14	事例検討・発表②				
15	まとめ				
期末					
授業に関する連絡	毎回、最後の10分で授業についての質問、コメントを「リアクション・ペーパー」に書いて提出する。				
評価方法及び評価基準	講義の区切れ目で、レポートを提出する（50%）。講義の最後には講義全体を振り返ってのレポートを提出する（50%）。それらを基に総合的に評価する。				
事前・事後学習の内容	講義の展開過程で逐次、参考文献を紹介するので、できるかぎりそれらを事前に読むことが求められる。				
履修上の注意	全講義に出席のこと				
テキスト	佐伯胖著『わかるということの意味』岩波書店				
参考文献	J. レイヴ&E. ウェンガー著佐伯 胖訳『状況に埋め込まれた学習―正統的周辺参加―』産業図書、1993年				

科 目 名	保育学特論		副題		
担 当 者	内藤 知美				
開 講 期	前期	単位数	2単位	配当年次	1・2年次
授業の概要	子どもは多様な関係性の中で学び、育つ存在である。また保育という営みは、子どもだけではなくそこに関わる保護者や保育者、そして地域、社会の学び、育ちと深く関わる。社会文化的視点から、多様で複雑な状況や文脈において生成される人間の「学び」や「育ち」を捉えるための視座を得るとともに、子どもが今を生きる「保育フィールド」の力動性や構造を読み解く方法について検討する。現在、「子ども人間学」と通底する観点から、保育を構築しようとする動きが生まれている。ニュージーランドの「テファリキ」を始めとする海外の保育の動向を捉えながら、多様で複雑な歴史、文化、社会が織り成すダイナミズムの中で、子どもが学びに向かう力や人間性を育むプロセスとそこに関わる人々（保育者、保護者等）のあり様を探究する。				
授業のねらい・到達目標	1. 子どもの「学び」や「育ち」を捉えるまなざしを問い直し、子どもが今を生きる場（保育フィールド）の構造や力動性を捉えるための視点を学ぶ。また保育フィールドで生成する多様な多層なことがらについての具体的な事例を検討することで、それらが子どもの学びや育ちにいかに関わるのか、その「意味」を解釈する様々な視点を学ぶ。 2. 海外の保育の動向から、子どもを起点に、保育にかかわる多様な人々が学び、変容するプロセスを捉える。そのことを通じて、保育が有する豊かな資源と新たな社会のあり方を構想する可能性を探る。				
授業の方法・授業計画					
1	保育のまなざし－教える、教えられる－				
2	子どもか子どもたちかという「問い」				
3	子どもの学びと育ちを捉える（1）発達と育ち				
4	子どもの学びと育ちを捉える（2）社会文化的アプローチ				
5	保育フィールドの構造と理解				
6	遊びを通じた保育（1）事例検討：身体的であること				
7	遊びを通じた保育（2）事例検討：共同的、協働的であること				
8	子どもに対する気づき（1）事例検討：なぜ気づくのか				
9	子どもに対する気づき（2）事例検討：枠組みの再構築				
10	保育における対話と同僚性				
11	保育実践と構造（1）：NZのテファリキの原理				
12	保育実践と構造（2）：NZの学びの物語と評価				
13	多様な「学び」の可能性が埋め込まれた保育の営み（1）：学びあい				
14	多様な「学び」の可能性が埋め込まれた保育の営み（2）：世代間循環				
15	まとめ：保育の課題と展望				
期末					
授業に関する連絡	本授業は講義と演習の両形式で行う。演習では、文献講読および実践事例を基にした討議のためのレジュメを担当者は作成すること。				
評価方法及び評価基準	授業内の発表や討議及びレジュメ作成（50%）、期末課題等（50%）を基に総合的に評価する。				
事前・事後学習の内容	授業中に適宜参考文献を紹介する。事前学習としては、参考文献を読んで授業へ臨むこと。また、事後学習としては、授業の内容を振り返り、さらに関連・関心のある参考文献を読み込み、自分の考えを整理すること。				
履修上の注意	各自のテーマ・関心から授業内の議論に積極的に参加すること。				
テキスト	マーガレット・カー著大宮勇雄・鈴木佐喜子訳『保育の場で子どもの学びをアセスメントする』ひとなる書房, 2013年 マーガレット・カー・ウェンディ・リー著『学び手はいかにアイデンティティを構築していくか』ひとなる書房, 2020年				
参考文献	入江礼子・友定啓子編『津守眞講演集 保育の現在-学びの友と語る-』萌文書林, 2015年 佐伯胖編『「子どもがケアする世界」をケアする』ミネルヴァ書房, 2017年 日本保育学会編『保育学講座Ⅰ保育学とは一問いと成り立ち』東京大学出版会, 2016年				

科目名	教育的ケアリング特論		副題		
担当者	吉國 陽一				
開講期	後期	単位数	2単位	配当年次	1・2年次
授業の概要	社会的な動物である人間にとってケアリングは生きることの根底にある営みと言える。一方で、ケアリングは生産優位の産業社会の中で女性というジェンダーに結び付けられながら、シャドウ・ワーク（支払われない仕事）としてその価値を貶められてきた経緯がある。文化人類学者のデヴィット・グレーバーによれば、全ての労働は本来、他者をケアしながら社会に貢献するという意味でケアリング労働であるが、生産としての労働からケアリング的側面が排除された結果、社会的価値のないブルシット・ジョブ(クソみたいな仕事)の増殖と、保育や福祉、教育など本来社会的価値がある仕事のシット・ジョブ(クソ扱いされる仕事=労働条件の劣悪な仕事)化を招いている。 本授業では上記のような背景を踏まえて、民主主義社会、保育、教育、倫理等をより人間的な営みとして再解釈し、編み直す上でケアリングの理論がもつ可能性について文献購読を通して理解を深めることを目指す。特に後半はネル・ノディングズのケアリング論に焦点を当て、保育実践におけるカリキュラムの構成原理や子ども理解の理論的枠組みとしてのケアリングが有する可能性を探る。				
授業のねらい・到達目標	・ケアリングの概念とケアリングを取り巻く現代の社会的コンテクストを理解する。 ・ケアリングが民主主義社会、教育、倫理等においてもつ可能性を理解する。 ・ノディングズのケアリング論の保育実践における意義を理解する。 ・ケアリングの観点から受講者それぞれの実践を再解釈することができるようになる。				
授業の方法・授業計画					
1	イントロダクション				
2	文献購読① ケアリングとは何か？				
3	文献購読② 民主主義社会におけるケアリングの意義				
4	文献購読③ 倫理学におけるケアリングの意義				
5	文献購読④ 教育におけるケアリングの意義				
6	文献購読⑤ ネル・ノディングズのケアリング論 なぜケアリングにかかわるのか				
7	文献購読⑥ ネル・ノディングズのケアリング論 ケアする人				
8	文献購読⑦ ネル・ノディングズのケアリング論 ケアされる人				
9	文献購読⑧ ネル・ノディングズのケアリング論 ケアリングの倫理 前編				
10	文献購読⑨ ネル・ノディングズのケアリング論 ケアリングの倫理 後編				
11	文献購読⑩ ネル・ノディングズのケアリング論 学校におけるケアの挑戦				
12	文献購読⑪ ネル・ノディングズのケアリング論 リベラル・エデュケーション批判				
13	文献購読⑫ ネル・ノディングズのケアリング論 代替するヴィジョン				
14	文献購読⑬ ネル・ノディングズのケアリング論 ケアリングと継続性				
15	文献購読⑭ ネル・ノディングズのケアリング論 自己をケアすること				
期末	試験				
授業に関する補足説明（課題に対するフィードバック、履修上のルール等）	文献購読にあたり、各自に作成してもらったレポートには授業の中でコメントを行う。				
評価方法及び評価基準	授業内で提出する小レポート及びディスカッション(80%)、及び最終レポート(20%)を基に評価を行う。				
事前・事後学習の内容	毎回の授業で扱う文献の該当箇所を読み、レポートを作成する。 毎回の授業内容について復習をする。				
履修上の注意	自分の実践や研究テーマに照らし、問題意識をもって毎回のディスカッションに参加することを期待する。				
テキスト	ネル・ノディングス 立山善康他訳『ケアリング 倫理と道徳の教育－女性の観点から』、晃洋書房、1997年 ネル・ノディングス 佐藤学他訳『学校におけるケアの挑戦—もう一つの教育を求めて』 ゆみ出版、2007年 ジョアン・C・トロント 岡野八代訳・著『ケアするのは誰か？ 新しい民主主義のかたちへ』 白澤社 2020年 広井良典『ケア学 越境するケアへ』 医学書院 2000年 ※ 必要に応じて上記文献のコピーを配布。なお、テキストは受講生の興味・関心に合わせて変更の可能性あり。				
参考文献	ジェーン・R・マーティン 生田久美子監訳『スクールホーム—ケアする学校』 東京大学出版会、2007年 ネル・ノディングス 佐藤学他訳『学校におけるケアの挑戦—もう一つの教育を求めて』 ゆみ出版、2007年 デヴィッド・グレーバー s酒井隆史他訳『ブルシット・ジョブ クソどうでもいい仕事の理論』 岩波書店 2020年				

科 目 名	子ども思想史特論		副題		
担 当 者	米山 光儀				
開 講 期	後期	単位数	2 単位	配当年次	1 ・ 2 年次
授業の概要	「子ども」という存在は、教育思想史の中でどのように捉えられていたのでしょうか。J. J. ルソーは「子どもの発見者」といわれるが、ルソーの子ども観はルソー以前のそれと何が異なっていたのでしょうか。授業では、ルソーの教育論について講義をするとともに、演習形式で『エミール』の第2編を読み、ルソーがどのように子どもについて論じているかを検討する。				
授業のねらい ・ 到達目標	・ 「子どもの発見」とはどのようなことかを理解する。 ・ ルソーの後世への影響について理解する。 ・ 教育学の古典に親しむ。				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション				
2	ルソーの教育論の構造①				
3	ルソーの教育論の構造②				
4	『エミール』序を読む				
5	『エミール』第1編を読む				
6	『エミール』第2編を読む①				
7	『エミール』第2編を読む②				
8	『エミール』第2編を読む③				
9	『エミール』第2編を読む④				
10	『エミール』第2編を読む⑤				
11	『エミール』第2編を読む⑥				
12	『エミール』第3編以降の展望				
13	現代におけるルソーの教育観・子ども観の意義（発表）①				
14	現代におけるルソーの教育観・子ども観の意義（発表）②				
15	まとめ				
期末	期末試験は行わない				
授業に関する 連 絡	授業は、講義と演習を組み合わせで行う。演習では、受講者にレジュメを作成して、発表してもらう。				
評価方法 及び評価基準	授業内で提出する数回の小レポート（50%）及び発表（50%）を基にして評価する。				
事前・事後 学習の内容	『エミール』の序および第1編は授業のはじめる前に読み、質問事項を整理しておくこと。第2編はよく読んで、授業に臨むこと。また、授業の振り返りを十分にしておいて、次の授業の準備をすること				
履修上の注意	授業内の議論に対する積極的な参加を求める。				
テキスト	ルソー著、今野一雄訳『エミール』上巻、岩波文庫（第74版改訂以降の版を用意すること）				
参考文献	ルソー著、今野一雄訳『エミール』中巻、下巻、岩波文庫 ルソー著、桑原武夫・前川貞次郎訳『社会契約論』、岩波文庫				

科目名	保育実践研究		副題		
担当者	高嶋 景子				
開講期	後期（隔年）	単位数	2 単位	配当年次	1 ・ 2 年次
授業の概要	「保育」という営みを探究していくためには、その実践的課題を、個々の保育者や子どもの持つ「能力」や「技術」の問題としてではなく、その「実践」に関わる多様な他者やモノ、環境等との関係の中で多層的に捉える視座が必要となる。そのように多層的に保育の営みを捉えながら、「子ども人間学」的観点に立って、自らの実践を省察していくまなざしを獲得していくため、本授業では、一人一人の受講者が実践的な場におけるフィールドでの観察や自らの実践を通して得た事例を基に、そこから見出される課題を共有し、「質の高い実践」とは何か、その在り方や構造について検討し、探究していく。				
授業のねらい・到達目標	保育という営みにおける具体的な事例のなかから、そこで問われるべき実践的課題を抽出し（「問い」を見出し）、それらを周囲の多様な他者やモノ、環境等との関係の中で適切に「問う」ことのできる視座を獲得していくと同時に、その視座を基に、子どもの育ちやその育ちを支える保育の在りようについて探究していくことを目的とする。				
授業の方法・授業計画					
1	ガイダンス				
2	「子どもをみる」ということ①～子どもをみるまなざしを規定する子ども観・発達観／自らの枠組みへの気づき～				
3	「子どもをみる」ということ②～「子どもを共感的にみる」ということの意味～				
4	「子どもをみる」ということ③～「子どもの育ちをみる」ということ／共感的理解を妨げるもの～				
5	実践事例研究Ⅰ①～各自の事例報告と討議：子どもを取り巻く関係構造への着目～				
6	実践事例研究Ⅰ②～各自の事例報告と討議：「気になる子」を生み出す関係構造～				
7	実践事例研究Ⅰ③～各自の事例報告と討議：子どもの「遊び」と仲間集団～				
8	実践事例研究Ⅰ④～各自の事例報告と討議：「遊び」を支える活動媒体としての「モノ」への着目～				
9	保育という営みを問い直す①～「ある」から「なる」を支える保育とは～				
10	保育という営みを問い直す②～「子どものケアする世界をケアする」ということの意味～				
11	実践事例研究Ⅱ①～各自の事例報告と討議：子どもを取り巻く実践共同体への着目～				
12	実践事例研究Ⅱ②～各自の事例報告と討議：保育の場における実践共同体の持つ多層性～				
13	実践事例研究Ⅱ③～各自の事例報告と討議：実践共同体の「境界」とその柔軟性の持つ意味～				
14	実践事例研究Ⅱ④～各自の事例報告と討議：子どもの育ちを支える保育者のまなざしと援助～				
15	まとめ				
期末					
授業に関する連絡	本授業は講義と演習の両形式で行う。演習においては、受講者全員が、自らの観察事例もしくはは実践事例と、その事例に対する考察の発表を行い、それらに対する討議を中心に授業を展開していく。				
評価方法及び評価基準	授業内の発表や討議（50%）、期末課題等（50%）を基に総合的に評価する。				
事前・事後学習の内容	授業において、実践的な場におけるフィールドでの観察、もしくは、自らの実践を通して得た事例、および、その事例に対する考察の発表を行うため、それらの事例の収集と検討を行うこと。また、授業後は、授業時の他の事例の発表や討議の振り返りを十分に行い、自分なりの考察を深めていくこと。				
履修上の注意	実践事例の収集のために保育現場での観察等が必要となる場合は、対象園の選定や依頼については、事前に授業担当教員へ相談すること。				
テキスト	未定				
参考文献	子どもと保育総合研究所編佐伯胖他著『子どもを「人間としてみる」ということ』ミネルヴァ書房, 2013年 岸井慶子著『見えてくる子どもの世界—ビデオ記録を通して保育の魅力を探る—』ミネルヴァ書房, 2013年 大宮勇雄著『学びの物語の保育実践』ひとなる書房, 2010年 柴山真琴著『子どもエスノグラフィー入門—技法の基礎から活用まで—』新曜社, 2006年				

科 目 名	保育者特論		副題		
担 当 者	高嶋 景子				
開 講 期	前期(隔年)	単位数	2 単位	配当年次	1 ・ 2 年次
授業の概要	子どもが主体となって自ら学ぶプロセスをして展開される保育においては、常に、予想外の出来事が生起し、刻々と状況が複雑に変化していく。保育者は、そのような複雑な状況と対話しつつ、眼前の子どもの思いや課題を丁寧に探り、その育ちを支える関わりや活動の在りようを検討し、実践していくことが求められる。そうした保育者の専門性は、D. ショーンの指摘するように、体系的な知識や法則を適用して問題を解決するような「技術的合理性」によって成り立っているものではなく、「反省的实践家」として、その在りようを読み解いていく必要があると考えられる。本講義では、そうした保育者の専門性について探究するため、まずは、「保育」という営みや、そこでの子どもの学びや育ちを理解するための視座を検討し、それを踏まえて、保育者の専門性と、その専門性の深まりを支える「省察」のプロセスと周囲の関係構造について考察していくこととする。				
授業のねらい・到達目標	1. 子どもの「学び」や「育ち」を捉えるための保育者のまなざしの在りようを探ると同時に、それらの「学び」や「育ち」を支える保育実践の構造と、それを実践する保育者の専門性を読み解くための様々な視点を学ぶ。 2. 保育者の専門性が深まっていく過程と、その過程を支える周囲の関係構造について探究していくための問いの持ち方、考え方を獲得する。				
授業の方法・授業計画					
1	ガイダンス				
2	保育者の専門性に関する研究の動向（1）～歴史の変遷を辿る～				
3	保育者の専門性に関する研究の動向（2）～近年の研究動向を探る～				
4	「保育」という営みを読み解く多様なアプローチ（1）～個体能力論から関係論的アプローチへの転換～				
5	「保育」という営みを読み解く多様なアプローチ（2）～保育者を取り巻く多様な関係構造への着目～				
6	「保育」という営みを読み解く多様なアプローチ（3）～正統的周辺参加論とは～				
7	「保育者になるということ」（1）～「子どもの声を聴く」とは～				
8	「保育者になるということ」（2）～子どもがケアする世界をケアするために：鑑識眼的なまなざし～				
9	「保育者になるということ」（3）～子どもがケアする世界をケアするために：保育における即興性～				
10	「保育者になるということ」（4）～子どもと保育者の相互主体性～				
11	保育者の学びを支える多様な対話（1）～省察的实践家としての保育者の専門性～				
12	保育者の学びを支える多様な対話（2）～事例を通して読み解く「省察」の生成過程～				
13	保育者の学びを支える多様な対話（3）～「省察」を引き出す保育カンファレンスの意義と役割～				
14	保育者の学びを支える多様な対話（4）～対話のもつ「多声性」への着目～				
15	まとめ				
期末					
授業に関する連絡	本授業は講義と演習の両形式で行う。演習では、文献購読及び実践事例を基にした討議を行うためのレジュメの作成の担当を課す。				
評価方法及び評価基準	授業内の発表や討議及びレジュメ作成（50%）、期末課題等（50%）を基に総合的に評価する。				
事前・事後学習の内容	授業の展開過程で適宜参考文献を紹介するため、できるかぎりそれらを事前に読んで授業へ臨むこと。また、授業後は振り返りを十分に自分の考えを整理すること。				
履修上の注意	各自のテーマや関心領域に対し探究心を持って、授業内の議論にも積極的に参加すること。				
テキスト	未定				
参考文献	子どもと保育総合研究所編佐伯胖他著『子どもを「人間としてみる」ということ』ミネルヴァ書房, 2013 倉橋惣三著『幼稚園真諦』フレーベル館, 1998 佐伯胖編著『「子どもがケアする世界」をケアするということ』ミネルヴァ書房, 2017				

科 目 名	子ども・子育て支援実践研究	副題	
担 当 者	犬塚 典子		
開 講 期	後期	単位数	2単位
		配当年次	1・2年次
授業の概要	子ども・子育て支援の実践について、前半は、家族の機能について理論的な検討を行い、OECD諸国の動向についてカナダに焦点をあてて分析する。後半は、日本の新聞、自治体広報など各種メディアの記事を共同で分析し、子育て支援実践のための理論、政策、財政のありかたについて検討する。		
授業のねらい・到達目標	1. 日本の子ども・子育て支援施策の変遷および現状について理解する。 2. 海外における施策や実践との比較から、日本の子ども・子育て支援制度の内容について理論的・実証的に分析する視点を身につける。 3. 現代社会の子ども・子育て環境やその実際について研究的な問題意識をもつようになる。		
授業の方法・授業計画			
1	家族の機能について考える（1）マードックの核家族の4機能		
2	家族の機能について考える（2）ポルトマンの仮説「生理的早産」		
3	家族の機能について考える（3）保育・幼児教育の市場化		
4	OECD諸国における子ども・子育て支援		
5	カナダにおける子どものケアと教育（1）全日制幼稚園		
6	カナダにおける子どものケアと教育（2）ドロップインセンター		
7	カナダにおける子どものケアと教育（3）父親休業		
8	日本の子ども・子育て支援政策の変遷ならびに現状		
9	日本の子ども・子育て支援事例の検討（1）幼稚園・保育所		
10	日本の子ども・子育て支援事例の検討（2）認定こども園		
11	日本の子ども・子育て支援事例の検討（3）事業所内保育施設		
12	日本の子ども・子育て支援事例の検討（4）病児・病後児保育		
13	日本の政策事例に対する討議（1）		
14	日本の政策事例に対する討議（2）		
15	まとめ		
期末			
授業に関する連絡	院生メールアドレスを通じて行う。		
評価方法及び評価基準	毎回の討議への貢献度を総合して評価する。		
事前・事後学習の内容	国内の政策や実践例について情報収集および整理を常に行うこと。また、毎回の授業内容を参照しつつ各自の課題研究を進めること。		
履修上の注意	課題発表のために授業時間外での研究調査を必要とする。		
テキスト	配布資料を中心に進める。		
参考文献	OECD『OECD保育白書』明石書店、2011年。		

科 目 名	児童家庭福祉特論		副題		
担 当 者	太田 由加里				
開 講 期	前期	単位数	2 単位	配当年次	1 ・ 2 年次
授業の概要	児童福祉の歴史や理論を基礎として、子どもたちの生活や子どもたちを取り巻く環境を社会福祉の視点で読み解いていく。特に乳幼児期から18歳未満までの子どもの福祉問題（貧困・社会的排除・虐待・ひとり親家庭の生活上の困難・社会的養護・いじめなど）に焦点をあてる。ここ数年のコロナ禍における子どもたちは、休園や休校、分散登校、様々な行事の中止など、これまでに経験したことのない新たな局面に向き合っている。広く社会構造の中で子ども・家族・地域をとらえ直し、専門職として求められる役割と機能、援助について社会福祉の観点から省察を深める。子どもたちの時事的な事象から社会的存在としての子どもを理解し、子どもを取り巻く家族の生活上の困難を把握、その解決方法について検討する。具体的な事例を基に実践の検討から実践を研究対象とするために必要な理論を学び検証する。				
授業のねらい・到達目標	1. 子ども人間学を学ぶうえで必要な社会的存在としての子どもを理解し子どもが抱える生活上の困難を把握する。 2. その困難を解決するために必要な教育や法制度などを学ぶ。 3. 社会経済的变化が子どもに与える影響を事象を通して理解する。 4. 日常的な子どもに関わる福祉実践を検討することから始め、それを研究の対象へとシフトさせるために必要な理論を探索、講読、その学識を身につける。 5. それらの理論が実践とどのように結びつき、日常の実践に活かせるのか、理論と実践の往還の意義を学ぶ。				
授業の方法・授業計画					
1	コロナ禍における日本及び世界の子どもたちー児童福祉の視点から				
2	子どもを取り巻く社会的状況①日本及び諸外国の子どもたち				
3	子どもを取り巻く社会的状況②家族と地域における子どもたち				
4	児童家庭福祉をめぐる法制度①児童福祉六法や最新の動向				
5	児童家庭福祉をめぐる法制度②児童福祉関連法（学校教育法や社会保障法など）				
6	児童家庭福祉の関係機関①児童相談所や児童福祉施設、学校などとの連携を実践事例を通して討議する				
7	児童家庭福祉の関係機関②福祉事務所や社会福祉協議会などとの連携を実践を通して討議する				
8	児童虐待の現状と支援～最新の報告書や事例を基に討議する				
9	不登校・いじめ・ひきこもりの現状と支援～事例を基に子どもや家族への対応について考える				
10	ひとり親家庭（母子・父子家庭）への支援～事例を基に子どもや家族への対応について考える				
11	障害児の療育と特別支援教育～事例を基に子どもや家族への対応について考える				
12	次世代育成支援（子ども・子育て関連法や施策）～地域の子育てサロンへの視察				
13	教育と福祉を繋ぐスクールソーシャルワーカーの役割～スクールソーシャルワーカーとの討議を通して考える				
14	諸外国における児童・家庭福祉の施策				
15	総括				
期末					
授業に関する連絡	本授業は講義と演習の両形式を用い、受講者の実践事例や各テーマに関する最新の報告書などを教材に討議を中心に展開する。				
評価方法及び評価基準	授業内の討論（30%）と課題（レポート）（70%）を基に総合的に評価する。				
事前・事後学習の内容	予習をして授業に臨むこと。また授業の振り返りを十分に行い次回の授業準備をすること。				
履修上の注意	各自の関心領域に対し探究心を持って、授業内の討論に積極的に参加すること。				
テキスト	履修者の問題関心に合わせた文献や資料を用意する。共有文献：『社会的養護のもとで育つ若者の「ライフチャンス」：選択肢（オプション）、つながり（リガチュア）の保障、生の不安定さからの解放を求めて』永野咲、明石書店、2017年、				
参考文献	松本伊智朗(2013)『子ども虐待と家族－「重なり合う不利」と社会的支援』明石書店 アマルティア・セン 大石りら訳（2002）『貧困の克服』集英社新書 ルース・リスター(2011)『貧困とは何か－概念・言説・ポリティクス』明石書店				

科 目 名	家族社会学特論		副題		
担 当 者	小玉 亮子				
開 講 期	後期	単位数	2 単位	配当年次	1 ・ 2 年次
授業の概要	アリエスの研究を嚆矢として家族が歴史的構築物であることが認識されるようになり、それまでの家族を本質から語るような議論ではなく、家族を社会的構築物としてみなす、いわゆる家族社会学のパラダイム転換が起こった。そして、そこから近代以降子どもに対する家族と学校の影響力は歴史的に未だかつてないほど強力なものとなったことがあきらかにされてきた。しかし、近代以降の家族と学校はいつでも期待される機能を十全に果たし得るとは限らない、家族と学校はそれぞれ課題に直面し、両者の関係は、複雑に問題を抱えることとなった。こういった家族と学校の複雑な関係に焦点を当てて、幼児教育を視野にいれながら家族の問題について社会学的に分析する。				
授業のねらい・到達目標	社会的な家族認識を学び、家族をマクロな視点及びミクロな視点から分析することによって、自らが無意識のうちにもつ家族観が普遍のものではないことを学び、自らの家族観を相対化することを試みる。同時に、家族について学校や地域との関係に焦点を当てて、家族が単独のシステムとしてあるのではなく、グローバル化が進む社会にあって、様々なシステムと相互的に存在していることを理解する。				
授業の方法・授業計画					
1	イントロダクション				
2	家族社会学のパラダイム転換				
3	近代家族とは何か				
4	近代家族と幼児教育				
5	社会変動の中の家族と教育（日本）				
6	社会変動の中の家族と教育（世界）				
7	子どもの発達と家族				
8	家族と学校の連携（就学前）				
9	家族と学校の連携（就学後）				
10	家族と子育て支援				
11	連携とパートナーシップ				
12	グローバル社会と家族（途上国）				
13	グローバル社会と家族（先進国）				
14	これからの家族と幼児教育の課題				
15	家族のゆくえ視野にいれて				
期末					
授業に関する連絡	社会における家族イメージを知るために、幼児教育と家族に関する報道などに注意しておくことは授業を受ける上で有益となる。				
評価方法及び評価基準	授業への参加及び、小レポートと研究発表を元に総合的に評価する。				
事前・事後学習の内容	事前に授業前の課題を伝えるので、その課題に取り組むこと。 授業後には、各自の問題意識に沿ったまとめを行うこと。				
履修上の注意	各自のテーマや関心領域に対し探求心を持って授業に参加すること。				
テキスト	小玉亮子編(2020)『幼児教育』ミネルヴァ書房				
参考文献	藤崎宏子・池岡義孝編『現代日本の家族社会学を問う』ミネルヴァ書房 アリエス（1980）『子どもの誕生』みすず書房 小玉亮子編（2017）『接続期の家族・園・学校』東洋館出版社				

科 目 名	子ども政策特論		副題		
担 当 者	渡邊 英則				
開 講 期	後期	単位数	2 単位	配当年次	1・2 年次
授業の概要	平成27年度から国の子どもや子育てに関する制度が大きく変わった。これまで縦割り行政で分かれていた幼稚園と保育所を、幼保連携型認定こども園という一つの制度としていく動きもこの制度改革の大きな柱になっている。また平成30年度からの学習指導要領改訂の動きは、小中学校の学習指導要領の改訂だけでなく、幼稚園や保育所、認定こども園も含め、日本の教育のあり方を大きく変えようとする改訂になっている。また幼児教育・保育の無償化が始まり、保育の質が問われる動きもでてきた。このような社会の動きや制度改革を見据えながら、実践する側の立場から、本来、求めるべき幼児教育・保育の姿を探求する。				
授業のねらい・到達目標	1. 制度が大きく変わるときに問われるのは理念である。国際的な幼児教育・保育の流れを見据えながら、日本の幼児教育・保育は、どのような制度になっていて、何か課題なのか等について、保育の実態も踏まえながら様々な視点から検討ができる力を養う。 2. 理念を具体的な実践として実現していく方法や考え方を獲得していく。				
授業の方法・授業計画					
1	ガイダンス				
2	OECDの調査・提言について～世界の乳幼児教育の流れを中心に～				
3	子ども・子育て支援新制度について ～新たな制度がめざす方向とは～				
4	学習指導要領の改訂について				
5	幼稚園制度の基本的な考え方と課題				
6	保育園制度の基本的な考え方と課題				
7	認定こども園制度について（1）～制度と仕組み～				
8	認定こども園制度について（2）～実際の保育を中心に～				
9	保育の質について（1）				
10	保育の質について（2）				
11	幼保小連携について				
12	特別支援教育について				
13	海外の保育制度について				
14	実践を深めていくために必要な視点とは何か				
15	まとめ				
期末					
授業に関する連絡	本授業は講義と演習の両形式で行う。演習では履修生にレジュメの作成の担当を課す。				
評価方法及び評価基準	授業内の発表や討議（50%）、期末課題（50%）を基に総合的に評価する。				
事前・事後学習の内容	授業の展開過程で適宜参考文献を紹介するため、できるかぎりそれらを事前に読んで授業へ臨むこと。また、授業後は振り返りを十分にしておいて自分の考えを整理すること。				
履修上の注意	各自のテーマや関心領域に対し探求心を持って、授業内の議論にも積極的に参加すること。				
テキスト	Peter Moss他著『保育の質を超えて』ミネルヴァ書房、2021年				
参考文献	佐伯胖他著『子どもを「人間としてみる」ということ』ミネルヴァ書房、2013年 カルナ・リナルディー著、里見実訳『レッジョ・エミリアと対話しながら』ミネルヴァ書房、2019年				

科 目 名	教育学特殊研究		副題		
担 当 者	米山 光儀				
開 講 期	前期	単位数	2単位	配当年次	1・2年次
授業の概要	「教育とは何か」という問いに対して、どのように答えるだろうか。この講義の前半では、これまでなされてきた教育の定義について検討し、新たな教育の定義を試みる。さらに、これまでの教育学の歩みを知るために、『原典による教育学の歩み』を読み、教育学の古典と向き合う時間を設ける。				
授業のねらい・到達目標	(1) 教育とは何かを自分のことばで語るができるようになる。 (2) 教育学の基本的な文献を読み、教育学の歩みを知る。				
授業の方法・授業計画					
1	イントロダクション				
2	教育はどのように定義できるか。(講義)				
3	国語辞書の「教育」を検討する(講義)				
4	教育事典の「教育」を検討する①(講義)				
5	教育事典の「教育」を検討する②(講義)				
6	教育の新しいモデルの提起(講義)				
7	教育のパラドックス(講義)				
8	『原典による教育学の歩み』を読む①(演習)				
9	『原典による教育学の歩み』を読む②(演習)				
10	『原典による教育学の歩み』を読む③(演習)				
11	『原典による教育学の歩み』を読む④(演習)				
12	『原典による教育学の歩み』を読む⑤(演習)				
13	『原典による教育学の歩み』を読む⑥(演習)				
14	『原典による教育学の歩み』を読む⑦(演習)				
15	まとめ				
期末					
授業に関する連絡	授業は、主に前半を講義、後半を演習で行う。演習では発表者がレジュメを作成して、行う。				
評価方法及び評価基準	授業内で提出する小レポート(50%)及び発表(50%)を基に評価する。				
事前・事後学習の内容	予習をしてから授業に臨むこと。また、授業の振り返りを十分に次回授業の準備をすること。				
履修上の注意	問題意識をもって、授業内の議論に積極的に参加すること。				
テキスト	沼野一男・田中克佳・松本憲・白石克己・米山光儀『教育の原理』第4版、学文社 村井実編『原典による教育学の歩み』、講談社				
参考文献	適宜、授業で紹介する。				

科目名	子どもとアート論		副題		
担当者	安村 清美・斉木 美紀子（オムニバス・一部共同）				
開講期	前期	単位数	2単位	配当年次	1・2年次
授業の概要	子どもの育ちを見通した時、アートに潜む創造的経験のプロセスに実践的学びとしての意味を見出すことができる。人間としての子ども期のアート経験が、その育ちにもたらす意味、特に保育現場におけるすべての子どものためのアート教育の可能性について、個別のアートの独自性及びトータルな識見をもてるよう、理論と実践を往還しながら研究する。 安村担当の講義では、舞踊家と教育現場の関わりと実践を通して、アートとして舞踊がもつ教育的意味について考察する。また、表現する身体について、身体を通して表現し人と共振することとは何か、その意味について芸術教育に関わる文献と事例を合わせて探究する。 斉木担当の講義では、音楽表現の視座から子どもの表現を捉え、表現する主体としての自分についても探求しながら、アート教育についての理解を深めていく。 その上で、担当者共同による講義では、子どもがアートに出合い経験することの意味について、上記の内容から個々の学生の学びを基にプレゼンテーション及びディスカッションを行う。				
授業のねらい・到達目標	1. 幼児期の子どもにとって、アートと出合い経験することがもたらす意味について、実践記録や研究を通して多様な視点から考察できるようになる。 2. 幼児期のアート経験の特徴として、その総合性に着目し、保育者としての総合的なプランニング力、実践力を修得する。				
授業の方法・授業計画					
1	「子どもとアート」について（人間としての子ども期のアート経験の意味）（安村・斉木）				
2	教育現場とアーティストの関わり①—子どもの育ちに関わる意味と可能性について（安村）				
3	教育現場とアーティストの関わり②—共振する身体：子どもの身体表現とコミュニケーション（安村）				
4	表現する身体：保育現場における子どもの身体とアート—実践記録を読む（安村）				
5	表現する身体：表現とプロセス、作品—実践記録、論文を読む（安村）				
6	創造的芸術経験のプロセスにおける実践的学びとしての意味①ディスカッション				
7	創造的芸術経験のプロセスにおける実践的学びとしての意味②実践・事例報告				
8	子どもの音楽表現の芽生えと学び（斉木）				
9	子どもと音環境（斉木）				
10	子どもとうた（斉木）				
11	子どもと楽器①民族楽器にふれる（斉木）				
12	子どもと楽器②楽器と関わる子ども（斉木）				
13	文化と子ども（斉木）				
14	課題のディスカッション・プレゼンテーション（安村・斉木）				
15	課題のプレゼンテーション、まとめと講評（安村・斉木）				
期末					
授業に関する連絡	本授業では内容に応じ講義形式、演習形式で授業を行う。実践を含む演習では、履修生に実践課題を課することがある。				
評価方法及び評価基準	小レポート（30%）、実践課題（30%）、プレゼンテーション（40%）を基に総合的に判断する。				
事前・事後学習の内容	事前学習として、自分自身が経験し、また保育現場で出合ったアート教育の課題を考える。さまざまなアートに親しみ、関心をもつ。事後学習として、各回の学習内容をまとめ、次回授業の課題準備につなげる。				
履修上の注意	実践を含む授業なので、指示に留意し、実践に適した服装で授業に臨むこと。				
テキスト	特になし				
参考文献	『松本千代栄撰集 2 人間発達と表現』舞踊文化と教育研究の会（編者代表：安村）編、2007、明治図書 『保育の中のアート』磯部、福田、2015、小学館 『子どもたちの創造力を育む—アート教育の思想と実践』佐藤、今井編、2003東京大学出版会 『表現者として育つ』佐伯、藤田、佐藤編、1995、東京大学出版会 『音楽を学ぶということ』今川、2016、教育芸術社				

科 目 名	子どもとことば論		副題	多文化共生時代の子どもとことば	
担 当 者	内藤 知美				
開 講 期	後期	単位数	2 単位	配当年次	1 ・ 2 年次
授業の概要	子どもの総合的発達におけることばの問題について、0歳から就学前までの時期の子どものことばの発達過程とことばの獲得に関わる社会・文化環境について理解を深める。家庭、幼稚園、保育所などの生活における子どものことばに関わる多様な事例を通して、子どもの生活や遊びと大人―子ども関係、子ども同士の関係がことばの発達にどのように相互に影響するのか、関係論的視点から検討する。また子どもを取り巻く社会・文化環境の変化、例えば乳幼児期からの視聴覚メディアの受容、日本語を母語としない子どもの増加、言葉の関わりのもちにくい子どもの問題など、子どもとことばを取り巻く今日的課題を捉える視点をもつことが目標である。また絵本などの児童文化財と子どもの関わりを探究し、実際の保育において子どものことばを育てることの意味を理解する。				
授業のねらい・到達目標	1. 子どもが多様ななかわりの中でことばを獲得していく過程について理解を深める。特に子どもが主体的にことばを使用することに着目し、ことばの獲得における「教え―教えられる」保育・教育の枠組みを問い直す。 2. ことばをめぐる理論の動向を踏まえるとともに、具体的な事例を通して、現代社会に生きる子どものことばの発達を問い、具体的かつ実践的視点から子どものことばが育つこと、そしてことばを育てることの意味を探究する。				
授業の方法・授業計画					
1	子どもとことばの関係性				
2	子どもとことばをめぐる社会環境・文化環境				
3	ことばの発達と保育（0歳期）				
4	ことばの発達と保育（1 語発話の時期）				
5	ことばの発達と保育（2 語発話の時期）				
6	ことばの発達と保育（2 歳期・3 歳期）				
7	ことばの発達と保育（4 歳期・5 歳期）				
8	ことばでの関わりのもちにくい子どもの援助①―多文化・多言語と子ども				
9	ことばでの関わりのもちにくい子どもの援助②―ことばとコミュニケーション（ビデオカンファレンスを通して）				
10	事例検討：同調、リズムとことば				
11	事例検討：共感性とことば				
12	事例検討：創造性や思考とことば				
13	ことばを育てる児童文化財の活用①―絵本などの児童文化財とことばの関係性				
14	ことばを育てる児童文化財の活用②―文化財を用いた子どものことばの育ちあい				
15	子どものことばと視聴覚メディア				
期末					
授業に関する連絡	個別のメールおよびでんでんばんを通して連絡をする。				
評価方法及び評価基準	小論文（レポート）50%、期末課題 50%				
事前・事後学習の内容	子どもとことばの発達をめぐる新しい理論、研究を随時紹介するので、関連する資料を熟読すること				
履修上の注意	保育事例検討では受講生が自ら考え、積極的に発言することを望む。また「子ども」や「ことば」に関する関連文献を読み、学びを深めることを期待する。				
テキスト	今井むつみ『ことばの発達の謎を解く』ちくまプリマー新書, 2013年、幼稚園教育要領（平成29年告示）、保育所保育指針（平成29年告示）、幼保連携型認定こども園教育・保育要領(平成29年告示)				
参考文献	岡本夏木『子どもとことば』（岩波新書1982）、麻生武『身ぶりからことばへ』（新曜社1992）青木保『異文化理解』（岩波新書2001）、佐伯胖『共感』（ミネルヴァ書房 2007）、今井むつみ『ことばと思考』（岩波新書2010）など授業中に適宜指示する。				

科 目 名	子ども環境学特論		副題		
担 当 者	仙田 考				
開 講 期	後期	単位数	2 単位	配当年次	1 年次・ 2 年次
授業の概要	現在の幼稚園教育の基本理念である「環境を通しての保育」の意義と在り方、またその実践について学ぶために、子どもと環境との関係、特に子どもと環境との相互関係に着目し、その発達過程と育成に必要な環境のあり方を論ずる。その際、今日の子どもたちを取り巻く環境の激変が、未来を担う子どもたちに与える影響を考察し、その課題を整理した上で、子どもの豊かな発達を支える保育環境や子どもに活力を与える社会環境の構築に必要な要素を検討する。子どもの視点から見た環境の捉え直しを横断的・学際的に検討する。また幼稚園等の保育現場を訪れ、保育の方法や実践について考える機会も持つ。 子ども環境学とは何かからはじめ、とくに子どもの遊び環境を中心的に取り上げながら、遊び空間の在り方、住まいの問題、安全な環境づくり、幼児教育施設、学校、医療環境、児童館・環境学習施設などの地域施設の現状などについて検討を進める。その上で、子どものための、子育てがしやすい街・都市づくりの在り方を展望し、子どもや子育て家庭を支える保育・教育実践のあり方を幅広い視点から考える。				
授業のねらい・到達目標	学生が、子どもがひと・もの・空間などさまざまな環境と関わる活動や子どもや子育てのための環境について、座学とともに、関連分野の専門家の話や、幼稚園等の保育現場の見学等を通して、子どもと環境との関係や、子どもの発達に寄与する環境のあり方を理解し、子どもや子育てにとってよりよい環境とはなにかを、学び考えることを目標とする。				
授業の方法・授業計画					
1	子ども環境学とは何か ― 幼稚園教育における「環境を通しての保育」とは				
2	子どものあそび環境（１） ― 子ども時代のあそび環境、生活環境				
3	子どものあそび環境（２） ― 時間、空間、集団、方法～遊環構造				
4	子どものための安全環境 ― あそび環境におけるリスクとハザード				
5	子どもと保育環境（１） ― 乳幼児と領域環境				
6	子どもと保育環境（２） ― 園舎、園庭環境、 保育と環境の構成				
7	子どもと園・地域の環境（１） ― 子どもの環境に関する現状、課題についての発表				
8	子どもと園・地域の環境（２） ― 子どもの環境に関する現状、課題についての発表				
9	子どもと園・地域の環境（３） ― 子どもの環境に関する現状、課題についての発表、討論				
10	子どもと環境学習 ― 自然、環境への気づきから持続発展教育へ				
11	子どものための環境づくり（１） ― 子どもにやさしい園環境づくり・まちづくりの在り方に向けて				
12	子どものための環境づくり（２） ― 子どもにやさしい園環境づくり・まちづくりの在り方に向けて				
13	乳幼児施設等の視察（１） ― 幼稚園、保育園等：園舎、園庭				
14	乳幼児施設等の視察（２） ― 幼稚園、保育園等：園舎、園庭				
15	乳幼児施設等の視察（３） ― 幼稚園、保育園等：園舎、園庭				
期末					
授業に関する連絡	本授業では講義や演習、さらには学外授業を取り入れて行う。				
評価方法及び評価基準	授業での発表・課題（50%）及びレポート（50%）を総合的に判断し評価する。				
事前・事後学習の内容	公園や児童館など子ども施設に足を運んで、実際の子ども施設がどのように作られ、使われている状況などを観察しながら、年齢や都市環境に応じどのようにあるべきかを考察してほしい。				
履修上の注意	各自の問題意識に基づいて授業での討論や視察に積極的に参加すること。				
テキスト	特になし				
参考文献	仙田満『子どもとあそび』岩波新書、1992年／仙田満・藤塚光政『幼児のための環境デザイン』世界文化社、2003年／仙田満『環境デザインの方法』彰国社、1998年／仙田満『環境デザイン講義』彰国社、2006年／仙田満『こどもの庭』世界文化社、2015年　ほか授業内で紹介				

科 目 名	発達心理学特論		副題		
担 当 者	横尾 暁子				
開 講 期	前期	単位数	2 単位	配当年次	1 ・ 2 年次
授業の概要	人間の生涯にわたる発達・成長のなかで、人生初期はその基盤となる重要な時期であると考えられている。本授業では、主に乳幼児期・児童期の子どもの心理学的発達をテーマとして扱い、国内外における研究成果を紹介する。 受講者は発達心理学分野の最新の論文の中から、各自関心のあるものを選び概要をまとめた上で、自身の考察や問題意識とともに発表する。論文および発表内容については、全員で討議を行う。				
授業のねらい・到達目標	・発達心理学の最新の研究成果を学び、発達や子どもとの関わりについて深く思考し、子どもという存在に対して多面的な理解を深める。 ・子どもの生涯の発達を見通し支えるために、発達心理学の研究成果を実践の場面でどのように応用できるかについて考える。				
授業の方法・授業計画					
1	ガイダンス				
2	心理学の研究法（実験、観察、調査、事例研究）				
3	研究計画と心理統計				
4	発達の基盤 - 遺伝と環境 -				
5	愛着の発達				
6	認知発達 - 表象の発達と概念の発達 -				
7	認知発達 - 言語発達と社会的認知の発達 -				
8	自己認知の発達				
9	道徳性と向社会的行動の発達				
10	問題解決行動の発達				
11	仲間関係の発達				
12	親子関係の発達 - 養育態度と発達 -				
13	食行動の発達				
14	保育者と子どもの関係				
15	振り返りとまとめ				
期末					
授業に関する連絡	本授業は内容に応じて、講義と演習の両形式で行う。 演習は、発表と討議を予定しており、履修生に資料作成の担当を課す。				
評価方法及び評価基準	授業内での発表および討議（50%）、課題内容（50%）に基づいて評価する。				
事前・事後学習の内容	事前：各回の授業のテーマについて、関連する基礎的な知識を確認し、自分の考えをまとめておくこと。また、配布資料や指定の文献等はよく読んでおくこと。発表担当の場合は、資料を準備すること。 事後：各回の学習内容を整理して、学期末の課題作成の準備につなげること。各自の問いや疑問点についてはさらに調べるなどして、学びを自ら深めていくことが望ましい。				
履修上の注意	履修生の積極的な参加を求める。				
テキスト	未定				
参考文献	山口真美・金沢創編著 『心理学研究法4 発達』 誠信書房 2011 渡辺弥生・伊藤順子・杉村伸一郎 『原著で学ぶ社会性の発達』 ナカニシヤ出版 2008 村井潤一 他 訳『発達心理学の基本を学ぶ』 ミネルヴァ書房 1997				

科目名	保育・教育課程研究		副題		
担当者	宮里 暁美				
開講期	後期	単位数	2単位	配当年次	1・2年次
授業の概要	幼児期の学びを支える保育は、生涯にわたる人格形成の基盤となる重要なものである。その保育を支えているものが「保育・教育課程」である。一人一人の子どもの現状や課題を丁寧に見出し、次なる経験に繋がる保育の活動や環境をデザインしていく保育・教育過程の実践について、文献や実践を通して検討する。保育・教育課程の展開を支える保育マネジメントの在り方や、保育・教育課程を実施していく保育者の在り方、実際の保育場面の中に見られる保育・教育課程の実践などに視点を置き、「問いかける」「問う」というアプローチを取りながら学びを深める。				
授業のねらい・到達目標	1. 幼児期の教育課程の特色について検討し、豊かな経験を生み出すための保育・教育課程を構成するポイントを理解する。 2. 具体的な幼児の姿の背景に、保育・教育課程が存在していることを確認し、計画から保育へ、保育の省察から計画へ、という循環を支える営みについて明らかにする。 3. 遊びの中の学びに着目し、学びを生み出す、教育課程の編成方法を構想する。				
授業の方法・授業計画					
1	講義・討議	乳幼児教育の在り方を問う：子どもの「やりたい！」が発揮される保育の実現			
2	講義・討議	乳幼児教育の在り方を問う：幼児期に育みたい資質・能力3つの柱			
3	講義・討議	乳幼児教育の在り方を問う：海外の実践例から			
4	文献研究	スウェーデン保育から幼児教育へ① スウェーデンの就学前学校の実践			
5	文献研究	スウェーデン保育から幼児教育へ② 就学前学校の質を支えるしくみ			
6	文献研究	スウェーデン保育から幼児教育へ③ 就学前学校カリキュラムの施行をめぐる			
7	保育観察①	保育の実践の中に身をおいたからこそ気づきをまとめる			
8	保育観察②	保育の実践の中に身をおき、自己課題に応じた学びを深める			
9	発表・討議	保育の実践から気づいたことについて			
10	発表・討議	保育の実践の中にある意味を深める			
11	発表・討議	保育とは何か？			
12	発表・討議	国内外の特色ある保育・教育課程①			
13	発表・討議	国内外の特色ある保育・教育課程②			
14	討議	豊かな経験を生み出す保育・教育課程の編成について			
15	講義	学びの振り返りとまとめ（課題レポート提出）			
期末					
授業に関する連絡	個別のメール及び、でんでんぱんを通して連絡をする。				
評価方法及び評価基準	事例分析や討議への参加意欲：40％ 資料準備及び提案内容：30％ 課題レポート：30％				
事前・事後学習の内容	事前：国内外の特色ある保育・教育課程については、各自で資料を探し提案準備を行う 事後：授業内容を整理し、学びを深める。必要に応じて、資料整理を行う。				
履修上の注意	特になし				
テキスト	白石淑江『スウェーデン保育から幼児教育へ 就学前学校の実践と新しい保育制度』かもがわ出版、2009年				
参考文献	エドガー・H・シャイン『問いかける技術』栄治出版 宮里暁美『耳をすまして目をこらす～いろとりどりの子どもの気持ち』赤ちゃんともママ社2021年 文部科学省『幼稚園教育要領解説』フレーベル館、2018年、厚生労働省『保育所保育指針解説書』フレーベル館、2018年				

科 目 名	権利擁護特論		副題		
担 当 者	國見 真理子・長谷川 洋昭（オムニバス・一部共同）				
開 講 期	後期（隔年）	単位数	2 単位	配当年次	1・2 年次
授業の概要	本講義では、複雑化する社会におけるこどもたちの権利擁護に関する知識を深め、質の高い実践力を養うことを目的とする。ここでは人間の尊厳の保持、権利擁護活動の支援等の視点を重視する。 國見担当の総論では、人間尊重を巡るリーガルマインドの理解を深めることを目指す。権利擁護制度概要、憲法上の基本的人権、その他関連法規を把握し、こどもを巡る権利擁護に関する事例研究を行う。 長谷川担当の各論では、履修者が関心のある領域を設定し、具体的事例に基づき現状と課題を明確化する。権利擁護に係わる関係機関・者のジレンマの正体は何か、その理論的理解を目指す。				
授業のねらい・到達目標	1. 権利擁護の現状と課題を、具体的実践事例に基づき理解する。 2. 文献・資料の検索と収集、分析手法の習得を並行しつつ、権利擁護に関連する制度・関係機関・者のあるべき姿を具体的に理解する。				
授業の方法・授業計画					
1	イントロダクション（國見・長谷川）				
2	憲法①：権利擁護と人権（國見）				
3	憲法②：権利擁護とこどもを巡る人権条約（國見）				
4	民法①：権利擁護と民法（國見）				
5	民法②：家族法（國見）				
6	行政法と権利擁護（國見）				
7	事例研究①（國見）				
8	事例研究②（國見）				
9	権利擁護と専門職（長谷川）				
10	児童虐待と権利擁護（長谷川）				
11	社会的排除と権利擁護（長谷川）				
12	施設内虐待と権利擁護（長谷川）				
13	事例研究①（長谷川）				
14	事例研究②（長谷川）				
15	総括（長谷川）				
期末					
授業に関する連絡	「でんでんぱん」を通じて履修者に適宜連絡する。				
評価方法及び評価基準	期末課題（40%）、コメントシート（30%）及び授業内の活動（30%）を総合的に勘案し評価する。				
事前・事後学習の内容	授業計画で授業内容を確認し、該当部分の下調べをしてから授業に出席すること。授業後は、充分な復習を行い、知識の定着をはかるよう努めること。				
履修上の注意	人権擁護に対する理解を深めるために、六法を授業の際に持参することを求める。				
テキスト	総論：最新版の『ポケット六法』（有斐閣） 各論：講義中に適宜資料等を配布する。				
参考文献	芦部信喜『憲法』（日本評論社） 秋元美世『ソーシャルワーカーのための法学』（有斐閣）				

科 目 名	障害児・者福祉特論（インクルーシブ論を含む）		副題		
担 当 者	新井 雅明				
開 講 期	前期（隔年）	単位数	2 単位	配当年次	1・2 年次
授業の概要	平成19年度の法改正により、わが国の障害児教育は、従来の「特殊教育」から「特別支援教育」へと大きく転換された。この背景には、障害の多様化、重度・重複化の進展に伴い、個別の教育的ニーズへの対応が求められたことと、国際的な潮流としての「インクルーシブ教育」の推進がある。個別の教育的ニーズへの対応とインクルーシブ教育の推進が、特別支援教育の重要課題となっているが、とりわけインクルーシブ教育の推進には大きな課題があり、様々な点から検討が必要になっている。現在の日本社会における障害児・者におけるインクルージョンの課題を分析し、その推進には何が必要かを、教育・福祉・保育の分野から検討する。また、広くソーシャルインクルージョンの課題にも視野を広げて研究する。				
授業のねらい・到達目標	1. インクルージョンの理念とその背景にあるものを理解する。 2. 日本社会におけるインクルージョンの課題を明らかにする。 3. 教育におけるインクルーシブ教育の現状と課題を理解する。 4. 福祉におけるインクルージョンの現状と課題を理解する。 5. 保育におけるインクルージョンの現状と課題を理解する。				
授業の方法・授業計画					
1	ガイダンスー津久井やまゆり園事件から考えるー				
2	障害者の権利に関する条約とその背景				
3	合理的配慮について				
4	日本社会における排除と受容ーホームレスの支援を続けてー				
5	インクルージョンの理念とその背景				
6	特別支援教育とは何か				
7	インクルーシブ教育の実際				
8	諸外国におけるインクルーシブ教育				
9	インクルーシブ教育から見る「不登校・いじめ」				
10	インクルーシブ教育から見る「引きこもり・ニート」				
11	幼稚園・保育園等におけるインクルージョン				
12	ホームレス障害者、累犯障害者				
13	インクルーシブ教育と授業のユニバーサルデザイン				
14	インクルーシブな社会の実現のために①				
15	インクルーシブな社会の実現のために②				
期末					
授業に関する連絡	次回のテーマ・内容については授業内で連絡する。				
評価方法及び評価基準	期末レポート（50%）及び発題発表（50%）に基づいて総合的に評価する。				
事前・事後学習の内容	事前に次回のテーマについて情報収集すること。事後には授業のまとめを行うこと。				
履修上の注意	社会的排除の問題について、広くニュースや文献を探って関心を持つことが望まれる。				
テキスト	「ホームレス障害者」鈴木文治著 日本評論社				
参考文献	「社会的排除」岩田正美著 有斐閣 「発達障害と少年犯罪」田淵俊彦著 新潮社 「排除する学校」鈴木文治著 明石書店				

科 目 名	地域福祉特論		副題		
担 当 者	和 秀俊				
開 講 期	後期（隔年）	単位数	2 単位	配当年次	1 ・ 2 年次
授業の概要	現代社会では、外国人家族の増加、核家族化や社会的孤立などに象徴される地域に共通する課題を解決するために、地域住民が支えあう地域福祉実践が求められている。この講義では、地域福祉実践の基礎となるコミュニティについて、近年のコミュニティ論を扱った学術書を読み込み、コミュニティの本質を探究し、今後の地域福祉実践に生かすことを目的とする。				
授業のねらい・到達目標	1．学術書の読み方を修得する。 2．コミュニティ論を探究し、地域福祉実践を学術的にアプローチできるようになる。 3．学術的な概念、理論を適切に理解し、活用できるようになる。				
授業の方法・授業計画					
1	オリエンテーション				
2	コミュニティとは①～理念・概念				
3	コミュニティとは②～理論				
4	コミュニティとは③～歴史				
5	コミュニティの現状①～都市部				
6	コミュニティの現状②～農村部				
7	コミュニティの現状③～離島				
8	コミュニティの課題①～都市部				
9	コミュニティの課題②～農村部				
10	コミュニティの課題③～離島				
11	コミュニティの展望①～都市部				
12	コミュニティの展望②～農村部				
13	コミュニティの展望③～離島				
14	コミュニティケアの展望				
15	コミュニティケアシステムの展望				
期末					
授業に関する連絡	本授業では、学術書を履修生全員で読み込み、各回担当の履修生がレジュメ作成を担当し、発表することを課する。その際、概念、理論などを理解した上で、レジュメ作成および発表をすること。				
評価方法及び評価基準	発表でのレジュメ作成（50％）、発表（50％）				
事前・事後学習の内容	予定されている内容に該当する教科書の章を事前に読んでおくこと 授業の内容を必ず復習すること				
履修上の注意	問題意識をもって、授業内の議論に積極的に参加すること。				
テキスト	未定（オリエンテーションの際に提示する）				
参考文献	広井義典・小林正弥編著「コミュニティ」勁草書房、伊豫谷登士翁・齋藤純一・吉原直樹「コミュニティを再考する」、吉原直樹「コミュニティ・スタディーズ」作品社				

科 目 名	生活環境学特論		副題		
担 当 者	山崎 さゆり				
開 講 期	前期（隔年）	単位数	2単位	配当年次	1・2年次
授業の概要	子どもは住まいを中心とした地域環境の中で、様々なヒト・モノ・コトと関わりながら多くの学習をし、やがて自立した人間へと成長していく。子どもの健やかな成長・発達と人格形成を促進、あるいは阻害する生活環境について考える。 対象領域は住宅・施設環境、地域環境であり、これら相互の密接な関連性を念頭に置きつつ人的・物的の両側面における環境整備課題を明らかにし、その過程から深い学識を醸成する。また、子どもの発達を支える生活環境についてグローバルな視点を含めて論理的分析を行い、それらの実現のために必要な質の高い実践力を養う。 授業では、人々にとって“居心地の良い環境・場所”とはどのようなものか、について、テキスト、および関連する文献・論文のレビューを行いながら討論を進め、子どもの人格形成や人間発達に深くかかわる生活環境のあり方を考えていく。				
授業のねらい・到達目標	1. 子どもの人間発達の観点から様々な生活環境の問題を捉え分析する中で深い学識を醸成する。 2. 生活行為と住空間の関係を多角的に捉え、人間相互の関係に及ぼす空間構造について理解する。 3. 子どもの生活空間形成の在り方、生活環境の改善の方向性について理解する。				
授業の方法・授業計画					
1	ガイダンス				
2	各自の興味・関心に沿ったテーマの検討				
3	テーマに関連した文献の紹介				
4	テキストの輪読①				
5	テキストの輪読②				
6	テキストの輪読③				
7	テキストの輪読④				
8	テキストの輪読⑤				
9	課題の設定				
10	関連論文のレビューと討論①				
11	関連論文のレビューと討論②				
12	関連論文のレビューと討論③				
13	課題に関する研究動向と評価の検討				
14	課題のレポート作成				
15	まとめ				
期末					
授業に関する連絡	個別のメール、または教学支援課を通して連絡をする。				
評価方法及び評価基準	報告（30%）、討論（30%）、レポート（40%）を総合して評価する。				
事前・事後学習の内容	事前・事後共に、関連する文献・資料を日頃から収集してよく読み込んでおくと同時に、毎回の授業における報告内容をまとめておくこと。				
履修上の注意	各自のテーマや関心領域に対し積極的に探究心をもって取り組み、問題意識が深まることを期待する。				
テキスト	日本建築学会編「まちの居場所 ささえる／まもる／そだてる／つなぐ」鹿島出版会 ISBN 978-4-306-04675-7C3052				
参考文献	小林秀樹著「居場所としての住まいーナワバリ学が解き明かす家族と住まいの深層」新曜社 高橋鷹志著「子どもを育てるたてもの学」チャイルド本社 北浦かほる著「世界の子どもの部屋ー子どもの自立と空間の役割」井上書院 住宅総合研究財団編「現代住宅研究の変遷と展望」丸善 バイ インターナショナル編著「新しいコミュニティを生み出す空間とデザイン」株式会社バイ インターナショナル				

科目名	精神医学特論		副題		
担当者	中川 正俊				
開講期	前期（隔年）	単位数	2単位	配当年次	1・2年次
授業の概要	精神医学の歴史、症候学、病院論など精神医学の見方、考え方を学び、心理学的理論モデルとの違い、実践における協働のあり方を学ぶ。具体的には、現在の症状分類の基本である「ICD-10精神および行動の障害」（WHO）、「DSM-5精神疾患の分類と診断の手引き」（米国精神医学会）を用い、現代精神医学の基礎知識の獲得を目指す。				
授業のねらい・到達目標	代表的な精神障害に関する専門的知識を取得する。 患者が体験する「病い」と生活・人生への影響について理解を深める。 専門的知識を支援の実践に応用する視点を獲得する。 精神医学および精神障害に関する様々な論点につき、自ら問いを發し論ずることができる。				
授業の方法・授業計画					
1	精神医学の基礎				
2	精神科診断学				
3	精神症状学				
4	認知症疾患				
5	統合失調症（概念、診断、疫学、成因仮説、症状）				
6	統合失調症（認知機能障害、特徴的行動特性、経過、予後、治療法）				
7	気分障害（概念、診断、成因仮説、症状）				
8	気分障害（経過、予後、治療法、特別なうつ病）				
9	神経症性障害、ストレス関連障害、身体表現性障害				
10	パーソナリティ障害、摂食障害				
11	小児期の精神障害				
12	身体的治療法				
13	精神療法				
14	環境・社会療法				
15	精神医療の現状				
期末					
授業に関する連絡	本授業は講義形式で進行するが、授業毎に質問や議論の時間も確保する。				
評価方法及び評価基準	レポート（70％）、質問・発話・討議への参加度（30％）				
事前・事後学習の内容	事前学習は、授業テーマにつき、文献などを使用して下調べをするとともに、生活や実践場面を通して生じた疑問点をまとめて授業に臨むこと。 事後学習は、授業で配布したプリントに基づき知識を整理すること。				
履修上の注意	履修者は積極的に議論に参加すること。				
テキスト	特になし。授業毎にプリントを配布する。				
参考文献	I C D－1 0 精神および行動の障害 - 臨床記述と診断ガイドライン新訂版（医学書院） 現代臨床精神医学第12版（今後出版）				

科 目 名	臨床心理学特論		副題		
担 当 者	寺沢 英理子				
開 講 期	後期（隔年）	単位数	2 単位	配当年次	1 ・ 2 年次
授業の概要	臨床心理学は人の病、障がい、生活や人間関係上の様々な困難などから生じる心の問題を、「心理内界」、「行動や認知」、「人間的関わり」などの側面から解明し、解決への道筋をつけようとしてきた。この授業ではいくつかの事例を題材として、こうした多面的な視点で事例を見ていくことをおこない、心理支援の専門職としての知識と技術の幅を拡げていくことを目標とする。				
授業のねらい ・ 到達目標	・ 心理支援に関する複数の理論を体系的に理解し説明出来る ・ 心理支援に関する複数の理論を用いて事例を多面的に考察し説明出来る				
授業の方法・授業計画					
1	授業オリエンテーション：授業概要、到達目標、授業の進め方				
2	心理支援に関する理論の確認：心理テストに関する理論				
3	心理支援に関する理論の確認：心理面接に関する理論				
4	心理支援に関する理論の確認：臨床心理学的地域支援に関する理論				
5	心理支援に関する理論の確認：心理支援対象者理解に関する理論				
6	心理支援に関する理論の確認：医学的診断に関する理論				
7	教材事例：子どもの事例				
8	教材事例：青年期の事例				
9	教材事例：成人の事例				
10	教材事例：高齢者の事例				
11	教材事例：障がい者の事例				
12	教材事例：精神疾患の事例				
13	教材事例：不登校、ひきこもりの事例				
14	教材事例：虐待、DV、PTSDの事例				
15	全体のまとめ				
期末	レポート				
授業に関する 連 絡	「でんでんぱん」の通知機能を用いておこなう。				
評価方法 及び評価基準	期末レポート（50％）、授業中の取り組み（50％）で総合的に判断する。				
事前・事後 学習の内容	毎回の授業で具体的に説明する。事前・事後合わせて2時間を求める。				
履修上の注意					
テキスト	特に使用しない。授業で資料を配布する。				
参考文献	授業で適宜紹介する。				

專門科目

(心理学専攻)

科 目 名	心理的アセスメントに関する理論と実践	副題			
担 当 者	寺沢 英理子・筒井 順子				
開 講 期	前期	単位数	2 単位	配当年次	1 年次
授業の概要	この授業では、心理支援専門職にとって必須の知識・技術となる心理的アセスメントの理論と実践的適用について学ぶ。具体的には心理的アセスメントの意義と理論的背景、心理に関する相談、助言、指導等での適切なアセスメント活動である。アセスメントに使用される各種心理検査、面接技法を目的に合わせて組み合わせること（バッテリー化）とその実施、結果の解釈と報告書の作成まで独力で出来ることが求められる。				
授業のねらい・到達目標	1．学部で身に着けた各種心理検査、面接の基本的技法のスキルアップを目標とする。 2．当該事例に合わせて検査バッテリーを組み、実施後の結果の整理と報告書の作成ができる。				
授業の方法・授業計画					
1	心理実践場面における心理アセスメントの役割と進め方				
2	心理アセスメントに有用な情報及びその把握の手法について				
3	心理に関する支援を要する者等に対して、関与しながらの観察について				
4	心理検査の種類、成り立ち、特徴、意義及び限界について				
5	心理検査の適性及び実施方法を学び、正しく実施し、検査結果を解釈することについて				
6	生育歴等の情報、行動観察及び心理検査の結果等を統合させて、包括的に解釈をするためのスキル				
7	適切に記録、報告、振り返り等を行うために				
8	報告書のまとめ方				
9	心理アセスメントから治療介入への移行について				
10	保健医療分野における事例の心理アセスメント				
11	福祉分野における事例の心理アセスメント				
12	教育分野における事例の心理アセスメント				
13	司法・犯罪分野における事例の心理アセスメント				
14	産業・労働分野における事例の心理アセスメント				
15	ケース検討会議での発表の仕方とチーム・アプローチのあり方を理解する				
期末					
授業に関する連絡	毎回、終了前10分で授業についての質問、コメントを求める。他の受講生と疑問点の解消を共有し、次回に臨む。				
評価方法及び評価基準	実践分野を任意に一つ選択し、想定事例を考え（20％）、心理アセスメントの手続きの作成（30％）、実施、結果の解釈（30％）から、介入手続き（ゴール）設定（20％）までをまとめたレポートを作成し提出する。それらを基に評価する。				
事前・事後学習の内容	実践実習に係わる授業のため、事前・事後の内容は相互に関連することとなる。事前学習では、前回の授業内容を十分復習して授業に臨み、事後学習では一連のアセスメントの流れの中での現在の位置づけを確認し、次回に臨むこととする。				
履修上の注意	全講義に出席のこと。				
テキスト	以下の参考文献を中心に適宜指示する。				
参考文献	八木亜紀子（著）「相談援助者の記録の書き方―短時間で適切な内容を表現するテクニック」、中央法規出版、2012年 近藤直司（著）「医療・保健・福祉・心理専門職のためのアセスメント技法を高めるハンドブック（第2版）」、明石出版、2015年 小海宏之（著）「神経心理学的アセスメント・ハンドブック」、金剛出版、2015年 津川律子（著）「精神科臨床における心理アセスメント入門」、西村書店、2009年 「臨床精神医学」編集委員会（編）「精神科臨床評価マニュアル（2016年版）」、アークメディア、2016年				

科 目 名	心の健康教育に関する理論と実践		副題			
担 当 者	伊東 秀幸					
開 講 期	前期	単位数	2 単位	配当年次	1 年次	
授業の概要	予防的な心理支援として重要となる心の健康教育に関する理論と実践を学ぶ。心の健康教育における公認心理師の役割、心の健康教育を支える理論、心の健康教育の内容と方法について理解を深め、実践出来ることが求められる。					
授業のねらい・到達目標	対象者のニーズをアセスメントし、適切な内容、方法による心の健康教育を実施できる。広く地域住民に対して、メディアを活用するなどした、心の健康に関する広報普及活動が展開できる。					
授業の方法・授業計画						
1	こころの健康とは何か					
2	健康教育とな何か					
3	こころの健康教育を支える理論 1 カウンセリング理論					
4	こころの健康教育を支える理論 2 コミュニティ心理学					
5	こころの健康教育を支える理論 3 学校心理学					
6	こころの健康教育の内容1 自己との関わりを考える					
7	こころの健康教育の内容2 他者・集団との関わりを考える					
8	こころの健康教育の内容3 学習・キャリアの課題					
9	こころの健康教育の内容4 心身の健康とのつきあい					
10	こころの健康教育の内容5 危機対処・レジリエンス					
11	こころの健康教育の方法 1 プログラムの組み立て					
12	こころの健康教育の方法 2 講義型のプログラム					
13	こころの健康教育の方法 3 演習型のプログラム					
14	こころの健康教育の方法 4 メディアを使った広報活動					
15	こころの健康教育の実践					
期末						
授業に関する連絡	本授業では、前半は主に講義形式、後半は演習形式での授業を行う。					
評価方法及び評価基準	授業ごとに担当者を決め発表を行う、その発表の内容（５０％）とレポートの内容（５０％）で評価する。					
事前・事後学習の内容	授業ごとの発表担当者はもとより、履修者全員、事前学習を十分行うこと。事後は、授業の内容をまとめておくこと。					
履修上の注意	履修者は、積極的に授業に参加すること。					
テキスト	特になし、授業ごとにプリントを配布する。					
参考文献	『公衆衛生学』医歯薬出版 『健康のための行動変容』 『こころの健康を支えるストレスとの向き合い方』					

科 目 名	心理支援に関する理論と実践		副題			
担 当 者	伊東 正裕・新井 彩加					
開 講 期	後期	単位数	2 単位	配当年次	1 年次	
授業の概要	心に関する相談、助言、指導その他の援助である心理支援に関する理論と実践を学ぶ。心理支援に関する代表的な理論と方法を理解し心理支援場面に応用出来ること、支援対象者の特性や状況に応じ支援方法の柔軟な選択・調整をおこなえるようになることが求められる。					
授業のねらい・到達目標	・心理支援に関する力動論に基づく心理療法の理論と方法を理解し説明出来る ・心理支援に関する行動論・認知論に基づく心理療法の理論と方法を理解し説明出来る ・その他の主要な心理療法の理論と方法を理解し説明出来る ・心理に関する相談・助言・指導等の活動に上記理論と方法を応用出来る ・心理支援を要する人々の特性や状況に応じて心理支援方法を適切に選択・調整出来る					
授業の方法・授業計画						
1	授業オリエンテーション：授業概要、到達目標、授業の進め方					
2	心理支援に関する力動論：フロイト世代					
3	心理支援に関する力動論：フロイト以降					
4	心理支援に関する行動論・認知論：行動療法					
5	心理支援に関する行動論・認知論：認知療法					
6	心理支援に関する行動論・認知論：認知行動療法					
7	心理支援に関するその他の理論・方法：パーソン・センタード、家族療法、内観法等					
8	心理支援に関する相談・助言・指導等への応用：力同論					
9	心理支援に関する相談・助言・指導等への応用：行動論・認知論					
10	心理支援に関する相談・助言・指導等への応用：その他の理論・方法					
11	心理支援対象者の特性・状況と力同論との関係					
12	心理支援対象者の特性・状況と行動論・認知論との関係					
13	心理支援対象者の特性・状況とその他の理論・方法との関係					
14	心理支援をおこなう者に共通な態度、考え方					
15	全体のまとめ					
期末	レポート					
授業に関する連絡	「でんでんぱん」の通知機能を用いておこなう。					
評価方法及び評価基準	期末レポート（60％）、授業中での課題等への取り組み（40％）で総合的に判断する。					
事前・事後学習の内容	毎回の授業で具体的に説明する。事前・事後合わせて2時間の学習を要する。					
履修上の注意						
テキスト	特に使用しない。授業中に資料を配布する。					
参考文献	授業中に適宜紹介する。					

科 目 名	家族関係・集団・地域社会における心理支援に関する理論と実践	副題	
担 当 者	渡邊 由己		
開 講 期	後期	単位数	2 単位
		配当年次	1 年次
授業の概要	家族・集団・地域社会の特徴を理解し、これらと心との関係を考慮した心理支援が出来ることは共生社会実現を志向する心理専門職に必須の知識と技法である。この授業では家族心理学やコミュニティ心理学の知見を応用しながら家族理解、集団理解、地域理解の理論とこれらに存在する様々な問題、および問題に対する支援、家族や地域の人々、多職種での連携と協働による支援それぞれの理論と方法、実践について学ぶ。		
授業のねらい・到達目標	・ 家族と構造と機能を理解し家族関係の課題とその克服に関する心理学的理論と知見を説明出来る ・ 家族関係の課題解決に対して心理支援の理論と技法を適切に導入出来る ・ 地域社会や集団（コミュニティ）の構造と機能を理解しそれらの課題とその克服に関する心理学的理論と知見を説明出来る ・ 地域社会や集団（コミュニティ）の課題解決に対して心理支援の理論と技法を適切に導入出来る		
1	授業オリエンテーション		
2	家族の構造と機能、現代家族の特徴		
3	家族関係と精神的健康、		
4	家族関係のアセスメント法		
5	家族の心理支援における代表的な介入技法		
6	地域社会と集団（コミュニティ）の構造と機能、現代地域社会の特徴と課題		
7	地域や集団（コミュニティ）のアセスメント法		
8	地域や集団（コミュニティ）の支援プログラム		
9	支援プログラムの評価理論		
10	支援プログラムの実際例と課題		
11	コンサルテーションとコラボレーション		
12	地域や集団支援チーム形成に関する心理学的理論		
13	地域や集団支援チームによる活動の実際と課題		
14	地域や集団（コミュニティ）への心理支援専門職の基本的態度と倫理		
15	まとめと発展		
期末			
授業に関する連絡	授業は講義形式を主体とするが、アセスメントに関する部分は演習も取り入れる。学生への連絡が必要な場合はポータルサイトででんぱんを通しておこなう。		
評価方法及び評価基準	最終レポート（50%）、何度か課す小レポート（30%）、授業中の発言等取組の積極性（20%）で総合的に評価する。		
事前・事後学習の内容	毎回の授業で配布する資料に基づき、予習・復習内容を具体的に指示する。		
履修上の注意	心理支援者としてこの授業がどう役立つのか、修士論文に役立つことはないだろうかなど、常に問題意識を持って積極的に関与されたい。		
テキスト	テキストは特に指定しない。授業中に資料を配布する。		
参考文献			

科 目 名	カウンセリング特論		副題		
担 当 者	伊東 正裕				
開 講 期	前期（隔年）	単位数	2 単位	配当年次	1年次・2年次
授業の概要	心理支援の中心的技法でもある心理カウンセリングの理論と技法について理解を深める。代表的なカウンセリングの理論と技法を振り返った後、心理力動論に基づくカウンセリングの過程を詳しく検討していく。カウンセリング場面における対人力動を理解出来ることは、多様な人々が共生するためのコミュニケーションにおける感情交流で生じる軋轢の理解と支援にも役立つはずである。対人関係における力動性を支援に活かせる力をつけることが目標である。				
授業のねらい ・到達目標	・ カウンセリングに関連する主要な理論、技法について理解し説明が出来る ・ 対人関係における力動のありようを、精神分析等の理論を通して理解し説明出来る ・ カウンセリング事例から、対人関係における力動性をどのように心理支援に活かすことが出来るか考察し説明することが出来る				
授業の方法・授業計画					
1	授業オリエンテーション：授業概要、到達目標、授業の進め方				
2	カウンセリングという心理支援の機能と役割				
3	カウンセリングの代表的な理論				
4	力動的立場における人間理解：フロイト、ユング、アドラー				
5	力動的立場における人間理解：フロイト以降 イギリス対象関係論				
6	力動的立場における人間理解：フロイト以降 アメリカ自我心理学				
7	カウンセリング関係の力動的理解：洞察と抵抗、転移と逆転移				
8	事例を用いた対人力動性の理解：子どもの事例				
9	事例を用いた対人力動性の理解：青年期の事例				
10	事例を用いた対人力動性の理解：成人の事例				
11	事例を用いた対人力動性の理解：保健・医療分野の事例				
12	事例を用いた対人力動性の理解：福祉分野の事例				
13	事例を用いた対人力動性の理解：産業・労働分野の事例				
14	事例を用いた対人力動性の理解：司法・犯罪分野の事例				
15	全体のまとめ				
期末	レポート				
授業に関する 連 絡	「でんでんばん」の通知機能を用いておこなう。				
評価方法 及び評価基準	期末レポート（50％）、授業中での課題等の取組（50％）で総合的に判断する。				
事前・事後 学習の内容	授業中に具体的な説明をおこなう。事前・事後合わせて2時間の学習を求める。				
履修上の注意					
テキスト	特に使用しない。授業中に適宜資料を配布する。				
参考文献	授業中に適宜紹介する。				

科 目 名	精神医学特論		副題		
担 当 者	中川 正俊				
開 講 期	前期（隔年）	単位数	2 単位	配当年次	1 ・ 2 年次
授業の概要	精神医学の歴史、症候学、病院論など精神医学の見方、考え方を学び、心理学的理論モデルとの違い、実践における協働のあり方を学ぶ。具体的には、現在の症状分類の基本である「ICD-10精神および行動の障害」（WHO）、「DSM-5精神疾患の分類と診断の手引き」（米国精神医学会）を用い、現代精神医学の基礎知識の獲得を目指す。				
授業のねらい・到達目標	代表的な精神障害に関する専門的知識を取得する。 患者が体験する「病い」と生活・人生への影響について理解を深める。 専門的知識を支援の実践に応用する視点を獲得する。 精神医学および精神障害に関する様々な論点につき、自ら問いを発し論ずることができる。				
授業の方法・授業計画					
1	精神医学の基礎				
2	精神科診断学				
3	精神症状学				
4	認知症疾患				
5	統合失調症（概念、診断、疫学、成因仮説、症状）				
6	統合失調症（認知機能障害、特徴的行動特性、経過、予後、治療法）				
7	気分障害（概念、診断、成因仮説、症状）				
8	気分障害（経過、予後、治療法、特別なうつ病）				
9	神経症性障害、ストレス関連障害、身体表現性障害				
10	パーソナリティ障害、摂食障害				
11	小児期の精神障害				
12	身体的治療法				
13	精神療法				
14	環境・社会療法				
15	精神医療の現状				
期末					
授業に関する連絡	本授業は講義形式で進行するが、授業毎に質問や議論の時間も確保する。				
評価方法及び評価基準	レポート（70％）、質問・発話・討議への参加度（30％）				
事前・事後学習の内容	事前学習は、授業テーマにつき、文献などを使用して下調べをするとともに、生活や実践場面を通して生じた疑問点をまとめて授業に臨むこと。 事後学習は、授業で配布したプリントに基づき知識を整理すること。				
履修上の注意	履修者は積極的に議論に参加すること。				
テキスト	特になし。授業毎にプリントを配布する。				
参考文献	I C D－1 0 精神および行動の障害 - 臨床記述と診断ガイドライン新訂版（医学書院） 現代臨床精神医学第12版（今後出版）				

科目名	リハビリテーション心理学特論		副題		
担当者	久保 義郎				
開講期	前期（隔年）	単位数	2単位	配当年次	1・2年次
授業の概要	リハビリテーション心理学は、障害や慢性疾患の研究、予後、治療に対して、心理学的知見と理解を適応するに特化した心理学の専門分野であり、ここでの公認心理師には、関係する要因（生物的、心理的、社会的、職業的、政治的要因）すべてを考慮に入れて、個人が最適な身体的、心理的、対人的機能を働かすことができるように援助することが求められる。具体的には、身体障害、知的障害及び精神障害、高次脳機能障害について概説でき、障害者（児）、高齢者の心理社会的課題及び必要な支援について説明できるようになることである。				
授業のねらい・到達目標	1. リハビリテーション心理学は心理学の諸領域が相互に関連しあって成り立っている学際領域である。これまで学んできた心理学の諸領域の関連性が説明できるようになる。 2. 障害の心理社会的意味を説明することができる。				
授業の方法・授業計画					
1	リハビリテーションとリハビリテーション心理学の位置づけ				
2	心理学におけるリハビリテーション心理学の位置づけ				
3	リハビリテーション心理学と心理学的リハビリテーション				
4	リハビリテーション心理学各論①：脊髄損傷・肢節切断のリハビリテーション心理学				
5	リハビリテーション心理学各論②：慢性疼痛のリハビリテーション心理学				
6	リハビリテーション心理学各論③：リハビリテーションにおける神経心理学的実践				
7	リハビリテーション心理学各論④：高次脳機能障害のリハビリテーション				
8	リハビリテーション心理学各論⑤：発達障害のリハビリテーション心理学				
9	リハビリテーション心理学各論⑥：認知リハビリテーションの考え方				
10	リハビリテーション心理学各論⑦：精神障害のリハビリテーション心理学				
11	リハビリテーション心理学各論⑧：リハビリテーション心理学から見た認知症				
12	リハビリテーション心理学各論⑨：障害受容について				
13	職業的リハビリテーションにおけるリハビリテーション心理学の役割と貢献				
14	ポジティブ心理学からリハビリテーション心理学への貢献				
15	リハビリテーション・チームにおける心理師の位置づけと適正				
期末					
授業に関する連絡	毎回、最後の10分で授業についての質問、コメントを求める。他の受講生との共有化をはかり、理解を深めることとする。				
評価方法及び評価基準	講義の区切れ目で、レポートを提出する（50%）。講義の最後には講義全体を振り返ってのレポートを提出する。それらを基に総合的に評価する。				
事前・事後学習の内容	講義の展開に合わせ適宜、参考文献を紹介するので、できるかぎりそれらを事前に読んで授業に望むこと。また、講義で学んだこと（各論）がリハビリテーションの考え方（思想）にどのように発展するのかを常に考えながら事後学習に努めること。				
履修上の注意	全講義に出席のこと。				
テキスト	以下の参考文献の中から、各回に関連のある章を取上げ授業を進める。				
参考文献	Frank, RG., Rosenthal, M., & Capla, B., "Handbook of Rehabilitation Psychology, 2nd ed." APA, 2010. 千野直一（監）・福原彰夫・才藤栄一（編）「現代リハビリテーション医学（改訂第4版）」、金剛出版、2017年 金田嘉清（著）「リハビリテーション（放送大学教材）改訂新版」、放送大学教育振興会、2013年				

科 目 名	精神保健医療心理学特論		副題		
担 当 者	伊東 秀幸				
開 講 期	後期（隔年）	単位数	2 単位	配当年次	1・2年
授業の概要	公認心理師法の成立は、心理支援の専門職が安定してその役割を果たすことにつながり、精神保健や精神障害の心理支援領域においても大きな意味をもつ。これからは比較的近い専門性を有する他職種とどのような関係性のもとで質の高い心理支援をおこなえるかが課題となる。この授業では、精神保健医療・福祉に関わる行政制度、法規、専門職の現状と課題を解説し、その上で公認心理師法に規定される役割を踏まえつつ、精神保健医療における心理支援専門職の役割と機能を考察する。				
授業のねらい・到達目標	精神障害者を取り巻く環境について説明できる 精神保健医療、福祉に関する法律、制度等を説明できる 関連専門職について説明ができ、連携を取ることができる 精神保健医療等の現場において、公認心理師として適切な役割を果たせることができる				
授業の方法・授業計画					
1	現代社会における精神障害者の排除				
2	精神障害者排除の歴史				
3	精神保健福祉法の理解				
4	医療観察法の理解				
5	障害者総合支援法の理解				
6	精神保健医療に関する行政制度の理解				
7	精神科医療機関における精神障害者への支援				
8	保健機関における精神障害者への支援				
9	福祉機関における精神障害者への支援				
10	司法領域における精神障害者への支援				
11	関係職種の専門性と役割				
12	関係職種との連携				
13	精神科医療機関における公認心理師の役割				
14	保健機関における公認心理師の役割				
15	福祉及び司法機関における公認心理師の役割				
期末					
授業に関する連絡	本授業では、前半は主に講義形式、後半は演習形式での授業を行う。				
評価方法及び評価基準	レポート（70％）、発言や討議への参加度（30％）				
事前・事後学習の内容	事前としては、各回のテーマについて文献などにより下調べをしておくこと。 事後としては、授業内で配布したプリント等により、知識を整理しておくこと。				
履修上の注意	履修者は、積極的に授業に参加すること。				
テキスト	特になし、授業ごとにプリントを配布する。				
参考文献	岡田靖雄著『日本精神科医療史』医学書院 『精神保健福祉法詳解』中央法規 町野朔ほか著『触法精神障害者の処遇』信山社 篠崎英夫著『精神保健学序説』へるす出版				

科目名	コミュニティ臨床心理学特論	副題	
担当者	渡邊 由己		
開講期	後期（隔年）	単位数	2単位 配当年次 1・2年次
授業の概要	社会問題が複雑・多様化してくるなかでは、単一の視点や方法では解決が難しく、より多面的で協働的な介入が必要になってくる。この授業では、コミュニティ支援において鍵となるチーム支援について、その基本理論と実際を学ぶ。また、コミュニティへの介入は介入プログラムとして体系的に実施される。この介入効果を評価する、プログラム評価の理論と方法についても学ぶ。		
授業のねらい・到達目標	・コミュニティについての考え方の歴史的変遷と、現代コミュニティが抱える臨床心理学的課題を理解し説明出来る ・チームの種類、機能、形成に関する心理学的理論と知識を理解し説明出来る ・心理支援専門職のコミュニティ・ケアチームにおける機能と役割、課題を理解し説明出来る ・プログラム評価の理論と方法、評価プロセスについて理解し説明出来る ・心理支援プログラムの具体例と評価について理解し説明出来る		
1	授業オリエンテーション：授業概要、到達目標、授業の進め方		
2	コミュニティの定義：歴史的変遷と新しいコミュニティの考え方		
3	コミュニティの変化と精神的健康との関係		
4	コミュニティへの心理支援：コンサルテーションとコラボレーション活動の実際		
5	コミュニティへの心理支援：予防と危機介入		
6	支援チームの背景理論：チームの種類と機能		
7	支援チームの背景理論：チームワークとチームビルディング		
8	コミュニティ・ケアにおける心理支援専門職の役割と課題		
9	コミュニティ支援のための臨床心理学的予防・介入プログラムの実際		
10	プログラム評価の理論：プロセス評価		
11	プログラム評価の理論：アウトカム評価		
12	プログラム評価の課題：計画と実施上の課題		
13	プログラム評価の課題：効果評価上の課題		
14	現代的コミュニティにおける臨床心理学的特徴と課題		
15	全体のまとめ		
期末	レポート課題		
授業に関する連絡	「でんでんぱん」の掲示機能を用いておこなう。		
評価方法及び評価基準	授業での課題に対する評価（30%）、期末のレポート課題（70%）		
事前・事後学習の内容	毎回の授業で具体的に説明する。事前・事後合わせて2時間の取り組みを求める。		
履修上の注意	「家族関係・集団・地域社会における心理支援に関する理論と実践」のアドバンスとなる。		
テキスト	特に使用しない。授業中に資料を配布する。		
参考文献	授業中に適宜紹介する。		

科 目 名	認知行動療法特論		副題		
担 当 者	久保 義郎				
開 講 期	後期（隔年）	単位数	2 単位	配当年次	1 年次・2 年次
授業の概要	心理療法には様々な理論と技法があるが、認知行動療法は学習理論などの心理学基礎研究の知見に基づき実証性の高い心理療法として発展してきた。この講義では認知行動療法の根幹とも言える学習理論について学ぶとともに、これまでの歴史的発展を概観した後、認知行動療法の理論と実践について学んでゆく。また、治療効果に関する研究知見にも注目し、心理療法的介入効果の実証手続きと、その課題について理解を深める。				
授業のねらい・到達目標	・ 認知行動療法の理論的枠組について、歴史的変遷を踏まえて理解し説明出来る ・ 認知行動療法の理論と手法について理解し説明出来る ・ 治療効果検討の基本的な実験デザインについて理解し説明出来る				
授業の方法・授業計画					
1	授業オリエンテーション：授業概要、到達目標、授業の進め方				
2	行動療法、認知療法、認知行動療法の概念と展開				
3	学習理論（レスポナント条件づけ）				
4	学習理論（オペラント条件づけ）				
5	学習理論（社会的学習理論）				
6	レスポナント条件づけに基づく行動療法（第一世代認知行動療法）：不安・恐怖反応の低減				
7	オペラント条件付けに基づく行動療法（第一世代認知行動療法）：適応行動の増大				
8	オペラント条件付けに基づく行動療法（第一世代認知行動療法）：不適応行動の低減				
9	社会的学習理論に基づく認知行動療法（第二世代認知行動療法）：モデリング、SST				
10	社会的学習理論に基づく認知行動療法（第二世代認知行動療法）：認知的行動変容				
11	第三世代認知行動療法				
12	第三世代認知行動療法の課題				
13	治療効果検討における基本的実験デザイン				
14	治療効果検討における課題				
15	全体のまとめ				
期末	レポート				
授業に関する連絡	「でんでんぱん」の通知機能や電子メールを用いておこなう。				
評価方法及び評価基準	期末レポート（60％）、授業中の課題等への取り組み（40％）で総合的に判断する。				
事前・事後学習の内容	毎回の授業で具体的に説明する。事前・事後合わせて2時間を要する。				
履修上の注意					
テキスト	特に指定しない。授業中に資料を配布する。				
参考文献	適宜紹介する。				

科 目 名	臨床心理学特論	副題			
担 当 者	寺沢 英理子				
開 講 期	後期（隔年）	単位数	2 単位	配当年次	1 ・ 2 年次
授業の概要	臨床心理学は人の病、障がい、生活や人間関係上の様々な困難などから生じる心の問題を、「心理内界」、「行動や認知」、「人間的関わり」などの側面から解明し、解決への道筋をつけようとしてきた。この授業ではいくつかの事例を題材として、こうした多面的な視点で事例を見ていくことをおこない、心理支援の専門職としての知識と技術の幅を拡げていくことを目標とする。				
授業のねらい ・ 到達目標	・ 心理支援に関する複数の理論を体系的に理解し説明出来る ・ 心理支援に関する複数の理論を用いて事例を多面的に考察し説明出来る				
授業の方法・授業計画					
1	授業オリエンテーション：授業概要、到達目標、授業の進め方				
2	心理支援に関する理論の確認：心理テストに関する理論				
3	心理支援に関する理論の確認：心理面接に関する理論				
4	心理支援に関する理論の確認：臨床心理学的地域支援に関する理論				
5	心理支援に関する理論の確認：心理支援対象者理解に関する理論				
6	心理支援に関する理論の確認：医学的診断に関する理論				
7	教材事例：子どもの事例				
8	教材事例：青年期の事例				
9	教材事例：成人の事例				
10	教材事例：高齢者の事例				
11	教材事例：障がい者の事例				
12	教材事例：精神疾患の事例				
13	教材事例：不登校、ひきこもりの事例				
14	教材事例：虐待、DV、PTSDの事例				
15	全体のまとめ				
期末	レポート				
授業に関する 連 絡	「でんでんばん」の通知機能を用いておこなう。				
評価方法 及び評価基準	期末レポート（50％）、授業中の取り組み（50％）で総合的に判断する。				
事前・事後 学習の内容	毎回の授業で具体的に説明する。事前・事後合わせて2時間を求める。				
履修上の注意					
テキスト	特に使用しない。授業で資料を配布する。				
参考文献	授業で適宜紹介する。				

科 目 名	心理支援技術演習		副題		
担 当 者	伊東秀幸・伊東正裕				
開 講 期	前期	単位数	1 単位	配当年次	1 年次
授業の概要	学部で培ってきた心理支援に関する基礎知識と技術を再確認し、より具体的な事例検討を通して、適応の可能性と限界を考える機会とする。これにより、心理に関する支援を要する者の特性や状況に応じて適切な支援方法を選択・調整することができるようになる。				
授業のねらい ・到達目標	- 心理支援に関する知識と技術を整理し、事例等に適切に当てはめることが出来る - 事例に則して複数の心理支援法の可能性を考えることが出来る - 支援領域別に心理支援計画を立てることが出来る				
授業の方法・授業計画					
1	授業オリエンテーション：授業概要、到達目標、授業の進め方				
2	心理支援に関する知識の整理：カウンセラーの態度				
3	心理支援に関する知識の整理：精神力動論的人間理解				
4	心理支援に関する知識の整理：認知・行動論的人間理解				
5	心理支援に関する知識の整理：人間学的人間理解				
6	心理支援に関する知識の整理：内観と森田神経質				
7	模擬事例を用いた心理支援の具体的適用：子どもの事例				
8	模擬事例を用いた心理支援の具体的適用：成人の事例				
9	心理支援計画の作成：保健・医療分野の事例				
10	心理支援計画の作成：福祉分野の事例				
11	心理支援計画の作成：教育分野の事例				
12	心理支援計画の作成：産業・労働分野の事例				
13	心理支援計画の作成：司法・犯罪分野の事例				
14	心理支援技術の適用と倫理的配慮				
15	全体のまとめ				
期末	レポート				
授業に関する 連 絡	「でんでんばん」の通知機能を用いておこなう。				
評価方法 及び評価基準	期末レポート（50％）、授業中の課題等への取り組み（50％）で総合的に判断する。				
事前・事後 学習の内容	毎回の授業で具体的に説明する。事前・事後合わせて1時間の学習を求める。				
履修上の注意					
テキスト	特に使用しない。授業中に資料を配布する。				
参考文献	適宜紹介する。				

科 目 名	公認心理師総合演習 I		副題		
担 当 者	渡邊 由己・櫻井 優太				
開 講 期	前期	単位数	1 単位	配当年次	2 年次
授業の概要	これまでの講義、演習、実習で各論的、領域的に形成された知識や技術を総動員し、高度な専門性を発揮して心理支援を実践出来る公認心理師を目標とした総合的な演習をおこなう。ここには心理支援に関する課題を用いた心理学諸領域の知識や理論の関係性整理と体系化、模擬的事例を用いて心理検査の種類や心理支援の技法を適切に選択しケース・フォーミュレーションをおこなうこと、検査報告書やケース記録の記述力向上や各種所見書、依頼書、申し送り書等の基本的書き方理解などが含まれる。また、心理支援に関する研究データの読み方や関連知識についても整理し体系化を図る。				
授業のねらい ・到達目標	・公認心理師に必要な知識を整理し、体系的・総合的に活用出来る。 ・模擬事例からケース・フォーミュレーションをおこなうことが出来る ・検査報告書、ケース記録を適切に記述し、所見書・依頼者・申し送り書等の基本的書き方を理解し作成出来る ・心理支援に関する研究を理解し、データを適切に読み取ることが出来る				
授業の方法・授業計画					
1	授業オリエンテーション：授業概要、到達目標、授業の進め方				
2	心理支援に関係する心理学基礎事項の確認テスト				
3	確認テストの解説				
4	模擬事例を用いたケース・フォーミュレーション：インテーク時の見立て方				
5	模擬事例を用いたケース・フォーミュレーション：ラ・ポール形成と支援課題の焦点化				
6	模擬事例を用いたケース・フォーミュレーション：心理検査の活用				
7	模擬事例を用いたケース・フォーミュレーション：所見書、ケース記録の書き方と活用				
8	模擬事例を用いたケース・フォーミュレーション：具体的技法の選択と実施				
9	模擬事例を用いたケース・フォーミュレーション：ケース会議の準備と開催、開催後の対応				
10	模擬事例を用いたケース・フォーミュレーション：スーパービジョンの活用				
11	模擬事例を用いたケース・フォーミュレーション：直面化と転機				
12	模擬事例を用いたケース・フォーミュレーション：終結、中断、他機関紹介、ケースのまとめ				
13	心理支援に関する研究データの読み方				
14	心理支援に関する知識整理の確認テスト				
15	確認テストの解説、全体のまとめ				
期末	レポート				
授業に関する 連 絡	「でんでんばん」の通知機能を用いておこなう。				
評価方法 及び評価基準	期末レポート（40％）、授業中の課題等への取り組み（60％）で総合的に判断する。				
事前・事後 学習の内容	毎回の授業で具体的に説明する。事前・事後合わせて1時間の学習を求める。				
履修上の注意	模擬事例は連続的な内容も扱うため、欠席は可能な限り少なくすること。				
テキスト	特に使用しない。資料を配布する。				
参考文献	適宜紹介する。				

科目名	公認心理師総合演習Ⅱ		副題			
担当者	渡邊 由己・櫻井 優太					
開講期	後期	単位数	1 単位	配当年次	2 年次	
授業の概要	公認心理師総合演習Ⅰに引き続き総合的な演習をおこなう。模擬的事例を用いた、多職種連携および協働による支援の計画策定、事例に対して関連する法律や行政制度の確認と、そのもとでの公認心理師の立場の理解、様々な事例を題材とした見立てや支援プロセスの検討をおこなうための討論、事例の中で突発的な状況変化の情報を挿入し、公認心理師としての対応を検討させること、倫理的・職務的な不適切行為の指摘と対応を考えさせる課題などを用いた実践的演習とする。また、心理学的調査や実験、介入の効果研究などによる知見を現場実践に導入する際の手法や留意点についても演習として取り上げる。					
授業のねらい・到達目標	・ 模擬事例から多職種連携・協働による心理支援の計画立案をおこなうことが出来る ・ 事例に対して関連する法律や行政制度を確認し、公認心理師との関連を理解し説明することが出来る ・ 事例を題材として見立てや支援法について討論をおこなうことが出来る ・ 模擬事例において突発的な出来事に対する柔軟で適切な発想と対応を考えることが出来る ・ 現場における研究実施の一連の計画、配慮、データ収集と分析について理解し説明出来る					
授業の方法・授業計画						
1	授業オリエンテーション：授業概要、到達目標、授業の進め方					
2	心理支援に関する知識の確認テストと解説					
3	模擬事例を用いた演習：多職種連携・協働による心理支援計画の立案					
4	事例を用いた、法律、行政制度と公認心理師業務との関係確認					
5	事例を題材としたケース検討：保健・医療分野					
6	事例を題材としたケース検討：福祉分野					
7	事例を題材としたケース検討：教育分野					
8	事例を題材としたケース検討：産業・労働分野					
9	事例を題材としたケース検討：司法・犯罪分野					
10	突発的な事態を挿入した事例での対応検討：子どもの事例					
11	突発的な事態を挿入した事例での対応検討：成人の事例					
12	心理支援のフィールド研究における計画と配慮					
13	心理支援のフィールド研究におけるデータ収集と分析					
14	公認心理師と人間学的学識との関わり					
15	心理支援に関する技術の確認テストと解説					
期末	レポート					
授業に関する連絡	「でんでんぱん」の通知機能を用いておこなう。					
評価方法及び評価基準	期末レポート（50％）、授業中の課題等への取り組み（50％）で総合的に判断する					
事前・事後学習の内容	毎回の授業で具体的に説明する。事前・事後合わせて1時間の学習を求める。					
履修上の注意						
テキスト	特に使用しない。授業中に資料を配布する。					
参考文献	授業中に適宜紹介する。					

科 目 名	保健医療分野に関する理論と支援の展開		副題		
担 当 者	伊東秀幸				
開 講 期	前期	単位数	2 単位	配当年次	1 年次
授業の概要	テーマは保健医療分野に関わる公認心理師の実践である。心の問題で不適応に陥っている人、心理的葛藤や家族関係・対人関係の困難から臨床心理学的な症状や問題を呈している人、慢性疾患を抱えた人、災害・犯罪被害等で心理的ケアが必要な人、心神喪失のため犯罪に至ってしまった人への臨床心理学的支援に関わる理論の獲得と、病院・診療所（精神科、心療内科等）、保健所、精神保健センター等における、心理査定、心理療法に加え、デイケアやコンサルテーションなどの活動内容、プロセスについて理解を深める。				
授業のねらい・到達目標	保健医療分野の機関において、公認心理師として適切な実践ができるようになるため、機関と心理学的知識と技術を結びつけられるようにすることが授業の目的であり、以下の5点を到達目標とする。 ・保健医療機関の機能を説明できる。 ・保健医療機関の対象者を説明できる。 ・保健医療機関の公認心理師の役割を説明できる。 ・保健医療機関で必要な知識、技術を説明できる。 ・対象者への適切な支援を考察できる。				
授業の方法・授業計画					
1	授業の進め方について				
2	保健医療分野の機関について				
3	精神科病院における公認心理師の役割				
4	精神科病院の事例検討				
5	精神科クリニックにおける公認心理師の役割				
6	精神科クリニックの事例検討				
7	精神科デイケアにおける公認心理師の役割				
8	精神科デイケアの事例検討				
9	医療観察病棟における公認心理師の役割				
10	医療観察病棟の事例検討				
11	保健所・保健センターにおける公認心理師の役割				
12	保健所・保健センターの事例検討				
13	精神保健福祉センターにおける公認心理師の役割				
14	精神保健福祉センターの事例検討				
15	コンサルテーションの方法				
期末					
授業に関する連絡	本授業では、講義と事例検討によって理解を深める。				
評価方法及び評価基準	レポート（70％）、発言や討議への参加度（30％）				
事前・事後学習の内容	事前としては、各回のテーマについて文献などにより下調べをしておくこと。 事後としては、授業内で配布したプリント等により、知識を整理しておくこと。				
履修上の注意	履修者は、積極的に授業に参加すること。				
テキスト	特になし、授業ごとにプリントを配布する。				
参考文献	「精神医学的面接」 みすず書房 「解決のための面接技法」 金剛出版				

科 目 名	教育分野に関する理論と支援の展開		副題		
担 当 者	渡邊 由己				
開 講 期	前期	単位数	2 単位	配当年次	1 年次
授業の概要	テーマは教育分野に関わる公認心理師の実践である。学校内での対人関係困難等の学校不適応、不登校傾向、学業困難やいじめ、ハラスメント、ひきこもり等の問題に関わる理論の獲得と、心理支援の展開について、スクールカウンセリングから大学学生相談まで含めて理解する。さらに学校内の相談室、教育センター、各種教育相談機関等において、本人との面接、保護者との面接、教員へのコンサルテーション、必要に応じた他機関との連携支援活動等、教育分野に関する広汎な支援の実践についても理解を深める。				
授業のねらい ・到達目標	・教育現場をめぐる臨床心理学的課題について理解し説明出来る ・いじめ、ハラスメントに対する心理支援の実践を理解し説明出来る ・学業困難、進路未決定に対する心理支援の実践を理解し説明出来る。 ・不登校、ひきこもりに対する心理支援の実践を理解し説明出来る ・心理支援における教員や保護者、他機関との連携に関する実践を理解し説明出来る				
授業の方法・授業計画					
1	授業オリエンテーション：授業概要、到達目標、授業の進め方				
2	教育現場における臨床心理学的課題				
3	いじめをめぐる心理支援の実際				
4	キャンパス・ハラスメントをめぐる心理支援の実際				
5	生徒の学業困難に関する心理支援の実際				
6	大学生の学習支援に関する心理支援の実際				
7	進路選択に関連した心理支援の実際				
8	大学生のキャリア探索をめぐる心理支援の実際				
9	不登校生徒に対する心理支援の実際				
10	青年期ひきこもりに対する心理支援の実際				
11	スクールカウンセリング、学生相談の役割と実際				
12	教育センターなど外部教育支援機関における心理支援の役割と実際				
13	教員や保護者との連携・協働による心理支援の実際				
14	教育分野における心理支援の課題				
15	全体のまとめ				
期末	レポート				
授業に関する 連 絡	「でんでんぱん」の通知機能を利用しておこなう。				
評価方法 及び評価基準	期末レポート（60％）、授業中の課題等への取り組み（40％）で総合的に判断する。				
事前・事後 学習の内容	毎回の授業で具体的に説明する。事前・事後合わせて2時間の学習を求める。				
履修上の注意					
テキスト	特に使用しない。授業中に資料を配布する。				
参考文献	授業中に適宜紹介する。				

科 目 名	福祉分野に関する理論と支援の展開		副題		
担 当 者	小山 望				
開 講 期	後期	単位数	2 単位	配当年次	1 年次
授業の概要	テーマは共生社会の実現に向けた 福祉分野に関わる公認心理師の役割と支援の実践である。子どもをめぐる様々な問題、虐待、非行、障害児・者、DV被害、高齢者の問題など、福祉に関わる幅広い領域に関する臨床心理学的理論の獲得と、児童相談所、療育施設、心身障害者福祉センター、障害者作業所、女性相談センター、老人福祉施設等における支援活動の実践について理解を深める。				
授業のねらい・到達目標	1. 日常生活を営む上で生じる困難、障害を緩和、解決するための社会制度、福祉サービスにおける心理職の専門性と役割を理解し、説明できる。 2. 各領域における支援のための理論の理解と具体的支援の方法を身につけ、説明できる。				
授業の方法・授業計画					
1	共生社会に向けた福祉分野における公認心理師の役割について				
2	子ども・家庭福祉分野の理論と支援①：児童福祉法と児童相談所の仕事				
3	子ども・家庭福祉分野の理論と支援②：社会的擁護と児童福祉施設				
4	子ども・家庭福祉分野の理論と支援③：子育て支援と地域児童福祉				
5	子ども・家庭福祉分野の理論と支援④：児童虐待への対応				
6	障害児・者福祉分野の理解と支援①：障害児支援 ICFの概念				
7	障害児・者福祉分野の理解と支援②：障害者支援とインクルーシブ教育				
8	障害児・者福祉分野の理解と支援③：障害者就労の現状と心理職の役割				
9	高齢者福祉分野の理解と支援①：少子超高齢社会の現状と問題				
10	高齢者福祉分野の理解と支援②：高齢者介入技法に係わる心理職の役割				
11	被害者支援分野の理論と支援①：DV被害者支援における心理職の役割				
12	被害者支援分野の理論と支援②：犯罪被害者支援における心理職の役割				
13	被害者支援分野の理論と支援③：災害被害者支援における心理職の役割				
14	地域福祉分野の理論と展開：子どもの貧困、ひきこもりへの対応（コミュニティケア）における心理職の役割				
15	共生社会における福祉分野の多職種連携のあり方について				
期末					
授業に関する連絡	毎回、最後の10分で授業についての質問、コメントを求める。他の受講生との共有をはかり、理解を深めることとする。				
評価方法及び評価基準	期末レポート（60％）と授業中の課題への取り組み（40％）で総合的な評価とする。				
事前・事後学習の内容	毎回の授業で具体的に説明する。事前・事後と合わせて2時間の学習を求める				
履修上の注意	連続性があるので全講義に出席のこと。				
テキスト	各回のテーマに合わせ以下の参考文献を中心に適宜指示する。				
参考文献	小山望他監修 これからの共生社会を考える 多様性を受容するインクルーシブな社会づくり 福村出版 中島健一編 福祉心理学 遠見書房 柿澤敏文編 障害児心理学 北大路書房 小西聖子（著）「犯罪被害者のメンタルヘルス」、誠信書房、2008年				

科 目 名	司法・犯罪分野に関する理論と支援の展開		副題		
担 当 者	松嶋 祐子				
開 講 期	前期	単位数	2 単位	配当年次	2 年次
授業の概要	テーマは司法・犯罪分野にわたる公認心理師の実践である。非行少年の矯正・社会適応に向けて、また、保護観察下の人や成人受刑者の社会適応・再犯防止に向けた臨床心理学的理論の獲得と、家庭裁判所、少年鑑別所、刑務所、拘留所、少年院、保護観察所、児童相談所、児童自立支援施設、警察関係相談機関等さまざまな専門的相談機関における心理支援の内容や連携・協働を理解する。また、犯罪被害者に対する心理支援や家事事件における心理支援についても取り上げる。				
授業のねらい・到達目標	・司法・犯罪分野における臨床心理学的課題について理解し説明が出来る ・司法・犯罪分野における心理支援専門職の具体的な実践内容について理解し説明出来る。 ・司法・犯罪分野における様々な機関で実践される心理支援のプロセスについて理解し説明出来る				
授業の方法・授業計画					
1	授業オリエンテーション（授業概要、到達目標、授業の進め方）、司法・犯罪分野における心理支援の基本事項				
2	少年非行（１）：家庭裁判所における心理支援の実践				
3	少年非行（２）：少年院，児童自立支援施設における心理支援の実践				
4	少年非行（３）：犯罪・非行のアセスメント①～少年鑑別所の鑑別を例として				
5	少年非行（４）：犯罪・非行のアセスメント②～司法犯罪領域における面接の特質				
6	成人司法（１）：司法・犯罪分野の成人に対する心理支援の基本的事項（刑事手続きの流れに沿って）				
7	成人司法（２）：刑事施設における処遇 1				
8	成人司法（３）：刑事施設における処遇 2				
9	保護観察所における心理支援の実践				
10	薬物等依存や嗜癖に対する心理支援の実践				
11	精神鑑定と情状鑑定に関する基本事項				
12	犯罪被害者に対する心理支援の実践				
13	家事事件における心理支援の実践（離婚と面会交流）				
14	授業内プレゼンテーション				
15	授業内プレゼンテーション				
期末					
授業に関する連絡	基本的な連絡はEメールで、また、資料共有はGoogle Driveを利用しておこなう。				
評価方法及び評価基準	授業内プレゼンテーション（60%）、授業中の課題等への取り組み（40%）で総合的に判断する。授業内プレゼンテーションでは、それまでの講義内容で特に関心を持ったトピックを一つ選び、関連事項について更に調べた内容を発表すること。また、内容は他の受講生の学習に貢献するものとする。				
事前・事後学習の内容	毎回の授業で具体的に説明する。事前・事後合わせて2時間の学習を求める。				
履修上の注意	司法・犯罪分野ならではの専門用語が多いので、わからない場合はそのままにせずに教員に質問するなどして早い段階で解決すること。				
テキスト	森丈弓・荒井崇史・嶋田美和・大江由香・杉浦希・角田亮（2021）『ライブラリ 心理学の社 15 司法・犯罪心理学』サイエンス社。その他、授業中に適宜資料を配布する。				
参考文献	授業中に適宜紹介する。				

科 目 名	産業・労働分野に関する理論と支援の展開		副題			
担 当 者	伊東 正裕					
開 講 期	後期	単位数	2 単位		配当年次	1 年次
授業の概要	テーマは産業・労働分野にわたる公認心理師の実践である。国や地方公共団体、企業内でのメンタルヘルス向上のため行われている臨床心理学的支援、コンサルテーション等に関わる理論の獲得と、企業内相談室、企業内健康管理センター、安全保健センター、ハローワーク、障害者職業センター等において行われている職業相談活動、具体的には職業への適性を巡る問題、発達障害を抱える人への臨床心理学的支援活動の実際とプロセスを理解する。					
授業のねらい・到達目標	・現代の産業・労働分野における臨床心理学的課題について理解し説明が出来る ・産業・労働分野における心理支援専門職の具体的な実践内容について理解し説明出来る。 ・就職や転職、企業内キャリア形成に関わる心理支援について理解し説明出来る					
授業の方法・授業計画						
1	授業オリエンテーション：授業概要、到達目標、授業の進め方					
2	産業・労働分野における臨床心理学的問題の変遷					
3	産業・労働分野における現代的な臨床心理学的課題					
4	企業内健康管理部門における心理支援専門職の機能と役割					
5	企業内健康管理部門における心理支援専門職の実践活動の実際					
6	外部EAP機関における心理支援専門職の機能と役割					
7	外部EAP機関における心理支援専門職の実践活動の実際					
8	就職・転職支援機関における心理支援専門職の機能と役割					
9	就職・転職支援機関における心理支援専門職の実践活動の実際					
10	障がい者就労支援における心理支援専門職の機能と役割					
11	障がい者就労支援における心理支援専門職の実践活動の実際					
12	ひきこもり・ホームレス支援における心理支援専門職の機能と役割					
13	ひきこもり・ホームレス支援における心理支援専門職の実践活動の実際					
14	産業・労働分野における心理支援専門職の課題					
15	全体のまとめ					
期末	レポート					
授業に関する連絡	でんでんばんを通しておこなう。					
評価方法及び評価基準	期末レポート（60％）、授業中の課題等への取り組み（40％）					
事前・事後学習の内容	毎回の授業で具体的に説明する。事前・事後合わせて2時間の学習を求める。					
履修上の注意						
テキスト						
参考文献						

科 目 名	心理実践実習指導Ⅰ		副題			
担 当 者	渡邊 由己・伊東 秀幸・伊東 正裕・寺沢 英理子・小山 望					
開 講 期	後期		単位数		1 単位	配当年次
					1 年次	
授業の概要	「心理実践実習Ⅰ」における事前・事後指導と、実習中の実習施設外指導をおこなう。必要に応じて実習現場指導者と連携を取り実習学生、実習先ともに安全で無理のない実習となるよう指導する、また将来心理専門職として活動するうえで、実習体験が経験知として生きてくるよう、実習の省察をおこなう。					
授業のねらい ・到達目標	・事前指導において、実習先の特徴、実習計画、実習態度（心構えを含む）を整理し、主体的に実習に向けて準備することが出来る ・実習中指導において、学生自らの実習の取り組みを主体的振り返り、心理実践実習における到達目標との距離を認識し、努力すべきことへの対処を見出し実践することが出来る ・事後指導において実習を総括し、心理実践実習の到達目標への到達状況を把握し実習の成果を報告することが出来る					
授業の方法・授業計画						
1	授業オリエンテーション					
2	事前指導：実習先の社会的機能と役割、心理支援との関わりを確認する。					
3	事前指導：実習先の社会的機能と役割、心理支援との関わりについて各自発表と討論をおこなう					
4	事前指導：実習生としての基本的態度					
5	事前指導：実習記録の取り方、各種報告書の書き方					
6	事前指導：実習直前の訪問報告					
7	実習中指導：実習開始数日での初期指導					
8	実習中指導：帰校日指導 1 集団指導					
9	実習中指導：帰校日指導 2 個別指導					
10	実習中指導：実習終了期の指導					
11	実習報告書の作成					
12	実習報告会の準備					
13	実習報告会実施（13回目と14回目の2回分を使用）					
14	実習報告会実施					
15	この期の実習のまとめ					
期末						
授業に関する 連 絡	でんでんぱんの通知機能を用いておこなう					
評価方法 及び評価基準	実習前、実習中、実習後それぞれの指導、課題への取り組みと報告会から総合的に評価する。					
事前・事後 学習の内容	実習前は実習に備えた準備を、実習中は効果的な指導を受けるための疑問点等の整理を、実習後は体験の整理と学びの内容を分かりやすくプレゼンテーションする準備と工夫をおこなうこと					
履修上の注意	実習と密接な関係をもつ授業である。実習が質の高い学びとなるよう、効果的に取り組んで欲しい					
テキスト						
参考文献						

科 目 名	心理実践実習Ⅰ		副題			
担 当 者	伊東 秀幸・伊東 正裕・渡邊 由己・寺沢 英理子・小山 望・筒井 順子・温泉 美雪 五島 史子・櫻井 優太・新井 彩加					
開 講 期	後期		単位数	1 単位	配当年次	1 年次
授業の概要	本科目の開講時期に配属される実習先において、心理に関する支援を要する者等に対して、現場の指導者とともに心理に関する支援の実践を行う。なお、保健医療機関（病院または診療所等）での実習を必須とし、それ以外に以下の4分野から最低2分野以上での実習を義務付ける。他の4分野とは、福祉、教育、司法、産業・労働であり、3分野以上の選択は、心理実践実習Ⅱ・Ⅲと調整する。					
授業のねらい ・ 到達目標	・ 心理支援対象者に対する以下の技術と知識を修得し活用出来る：コミュニケーション、心理検査、心理面接、地域支援 ・ 支援対象者の理解とニーズを把握し支援計画を作成出来る ・ 支援対象者へのチームアプローチが出来る ・ 多職種連携や地域連携が出来る ・ 公認心理師としての職業倫理および法的義務を理解し説明出来る					
授業の方法・授業計画						
・ 設定された実習計画にしたがい、学外施設、機関、病院等で現場指導者の指導と管理の下、実習をおこなう。 ・ 実習生はこれまで身につけた知識や技術、学部レベルの実習で学んだことを基礎として、上記到達目標を達成するため見学だけではなく、支援対象者への支援を実践しながら実習をおこなうこと。 ・ 現場指導者による指導のほか、「心理実践実習指導1」による実習前、実習中、実習後の指導もおこなうので、こちらへの参加も必須である						
期末						
授業に関する 連 絡	でんでんばんによる通知機能を用いた連絡の他、実習中の緊急事態に備えて携帯電話、メール等の活用もおこなう。					
評価方法 及び評価基準	現場指導者の評価、実習前・実習中・実習後の指導による評価、課題レポート等の評価により総合的におこなう。					
事前・事後 学習の内容	毎回の実習前にはその回の計画をよく確認し、実習後には実習記録を書きながら十分な振り返りをおこなうこと。					
履修上の注意	他施設・機関等の協力により実施出来ることである。実習先に迷惑をかける態度は厳しく指導する。場合によっては実習中止になることもあるので注意すること。					
テキスト						
参考文献						

科 目 名	心理実践実習指導Ⅱ		副題			
担 当 者	渡邊 由己・伊東 秀幸・伊東 正裕・寺沢 英理子・小山 望					
開 講 期	前期	単位数	1 単位	配当年次	2 年次	
授業の概要	「心理実践実習Ⅱ」における事前・事後指導と、実習中の実習施設外指導をおこなう。必要に応じて実習現場指導者と連携を取り実習学生、実習先ともに安全で無理のない実習となるよう指導する、また将来心理専門職として活動するうえで、実習体験が経験知として活かせるよう、実習の省察をおこなう。					
授業のねらい ・ 到達目標	・ 事前指導において、実習先の特徴、実習計画、実習態度（心構えを含む）を整理し、主体的に実習に向けて準備することが出来る ・ 実習中指導において、学生自らの実習の取り組みを主体的振り返り、心理実践実習における到達目標との距離を認識し、努力すべきことへの対処を見出し実践することが出来る ・ 事後指導において実習を総括し、心理実践実習の到達目標への到達状況を把握し実習の成果を報告することが出来る					
授業の方法・授業計画						
1	授業オリエンテーション					
2	事前指導：実習先の社会的機能と役割、心理支援との関わりを確認する。					
3	事前指導：実習先の社会的機能と役割、心理支援との関わりについて各自発表と討論をおこなう					
4	事前指導：実習生としての基本的態度					
5	事前指導：実習記録の取り方、各種報告書の書き方					
6	事前指導：実習直前の訪問報告					
7	実習中指導：実習開始数日での初期指導					
8	実習中指導：帰校日指導 1 集団指導					
9	実習中指導：帰校日指導 2 個別指導					
10	実習中指導：実習終了期の指導					
11	実習報告書の作成					
12	実習報告会の準備					
13	実習報告会実施（13回目と14回目の2回分を使用）					
14	実習報告会実施					
15	この期の実習のまとめ					
期末						
授業に関する 連 絡	でんでんぱんの通知機能を用いておこなう					
評価方法 及び評価基準	実習前、実習中、実習後それぞれの指導、課題への取り組みと報告会から総合的に評価する。					
事前・事後 学習の内容	実習前は実習に備えた準備を、実習中は効果的な指導を受けるための疑問点等の整理を、実習後は体験の整理と学びの内容を分かりやすくプレゼンテーションする準備と工夫をおこなうこと					
履修上の注意	実習と密接な関係をもつ授業である。実習が質の高い学びとなるよう、効果的に取り組んで欲しい					
テキスト						
参考文献						

科 目 名	心理実践実習Ⅱ			副題	
担 当 者	伊東 秀幸・伊東 正裕・渡邊 由己・寺沢 英理子・小山 望・筒井 順子・温泉 美雪 五島 史子・櫻井 優太・新井 彩加				
開 講 期	前期	単位数	1 単位	配当年次	2 年次
授業の概要	本科目の開講時期に配属される実習先において、心理に関する支援を要する者等に対して、現場の指導者とともに心理に関する支援の実践を行う。なお、保健医療機関（病院または診療所等）での実習を必須とし、それ以外に以下の4分野から最低2分野以上での実習を義務付ける。他の4分野とは、福祉、教育、司法、産業・労働であり、3分野以上の選択は、心理実践実習Ⅰ・Ⅲと調整する。				
授業のねらい ・ 到達目標	・ 心理支援対象者に対する以下の技術と知識を修得し活用出来る：コミュニケーション、心理検査、心理面接、地域支援 ・ 支援対象者の理解とニーズを把握し支援計画を作成出来る ・ 支援対象者へのチームアプローチが出来る ・ 多職種連携や地域連携が出来る ・ 公認心理師としての職業倫理および法的義務を理解し説明出来る				
授業の方法・授業計画					
・ 設定された実習計画にしたがい、学外施設、機関、病院等で現場指導者の指導と管理の下、実習をおこなう。 ・ 実習生はこれまで身につけた知識や技術、学部レベルの実習で学んだことを基礎として、上記到達目標を達成するため見学だけではなく、支援対象者への支援を実践しながら実習をおこなうこと。 ・ 現場指導者による指導のほか、「心理実践実習指導Ⅱ」による実習前、実習中、実習後の指導もおこなうので、こちらへの参加も必須である					
期末					
授業に関する連絡	でんでんばんによる通知機能を用いた連絡の他、実習中の緊急事態に備えて携帯電話、メール等の活用もおこなう。				
評価方法及び評価基準	現場指導者の評価、実習前・実習中・実習後の指導による評価、課題レポート等の評価により総合的にこなう。				
事前・事後学習の内容	毎回の実習前にはその回の計画をよく確認し、実習後には実習記録を書きながら十分な振り返りをおこなうこと。				
履修上の注意	他施設・機関等の協力により実施出来ることである。実習先に迷惑をかける態度は厳しく指導する。場合によっては実習中止になることもあるので注意すること。				
テキスト					
参考文献					

科 目 名	心理実践実習指導Ⅲ	副題			
担 当 者	渡邊 由己・伊東 秀幸・伊東 正裕・寺沢 英理子・小山 望				
開 講 期	後期	単位数	1 単位	配当年次	2 年次
授業の概要	「心理実践実習Ⅲ」における事前・事後指導と、実習中の実習施設外指導をおこなう。必要に応じて実習現場指導者と連携を取り実習学生、実習先ともに安全で無理のない実習となるよう指導する、また将来心理専門職として活動するうえで、実習体験が経験知として活かせるよう、実習の省察をおこなう。				
授業のねらい ・ 到達目標	・ 事前指導において、実習先の特徴、実習計画、実習態度（心構えを含む）を整理し、主体的に実習に向けて準備することが出来る ・ 実習中指導において、学生自らの実習の取り組みを主体的振り返り、心理実践実習における到達目標との距離を認識し、努力すべきことへの対処を見出し実践することが出来る ・ 事後指導において実習を総括し、心理実践実習の到達目標への到達状況を把握し実習の成果を報告することが出来る				
授業の方法・授業計画					
1	授業オリエンテーション				
2	事前指導：実習先の社会的機能と役割、心理支援との関わりを確認する。				
3	事前指導：実習先の社会的機能と役割、心理支援との関わりについて各自発表と討論をおこなう				
4	事前指導：実習生としての基本的態度				
5	事前指導：実習記録の取り方、各種報告書の書き方				
6	事前指導：実習直前の訪問報告				
7	実習中指導：実習開始数日での初期指導				
8	実習中指導：帰校日指導 1 集団指導				
9	実習中指導：帰校日指導 2 個別指導				
10	実習中指導：実習終了期の指導				
11	実習報告書の作成				
12	実習報告会の準備				
13	実習報告会実施（13回目と14回目の2回分を使用）				
14	実習報告会実施				
15	この期の実習のまとめ				
期末					
授業に関する 連 絡	でんでんぱんの通知機能を用いておこなう				
評価方法 及び評価基準	実習前、実習中、実習後それぞれの指導、課題への取り組みと報告会から総合的に評価する。				
事前・事後 学習の内容	実習前は実習に備えた準備を、実習中は効果的な指導を受けるための疑問点等の整理を、実習後は体験の整理と学びの内容を分かりやすくプレゼンテーションする準備と工夫をおこなうこと				
履修上の注意	実習と密接な関係をもつ授業である。実習が質の高い学びとなるよう、効果的に取り組んで欲しい				
テキスト					
参考文献					

科 目 名	心理実践実習Ⅲ			副題	
担 当 者	伊東 秀幸・伊東 正裕・渡邊 由己・寺沢 英理子・小山 望・筒井 順子・温泉 美雪 五島 史子・櫻井 優太・新井 彩加				
開 講 期	後期	単位数	1 単位	配当年次	2 年次
授業の概要	本科目の開講時期に配属される実習先において、心理に関する支援を要する者等に対して、現場の指導者ととも心理に関する支援の実践を行う。なお、保健医療機関（病院または診療所等）での実習を必須とし、それ以外に以下の4分野から最低2分野以上での実習を義務付ける。他の4分野とは、福祉、教育、司法、産業・労働であり、3分野以上の選択は、心理実践実習Ⅰ・Ⅱと調整する。				
授業のねらい ・ 到達目標	・ 心理支援対象者に対する以下の技術と知識を修得し活用出来る：コミュニケーション、心理検査、心理面接、地域支援 ・ 支援対象者の理解とニーズを把握し支援計画を作成出来る ・ 支援対象者へのチームアプローチが出来る ・ 多職種連携や地域連携が出来る ・ 公認心理師としての職業倫理および法的義務を理解し説明出来る				
授業の方法・授業計画					
・ 設定された実習計画にしたがい、学外施設、機関、病院等で現場指導者の指導と管理の下、実習をおこなう。 ・ 実習生はこれまで身につけた知識や技術、学部レベルの実習で学んだことを基礎として、上記到達目標を達成するため見学だけではなく、支援対象者への支援を実践しながら実習をおこなうこと。 ・ 現場指導者による指導のほか、「心理実践実習指導Ⅲ」による実習前、実習中、実習後の指導もおこなうので、こちらへの参加も必須である					
期末					
授業に関する 連 絡	でんでんばんによる通知機能を用いた連絡の他、実習中の緊急事態に備えて携帯電話、メール等の活用もおこなう。				
評価方法 及び評価基準	現場指導者の評価、実習前・実習中・実習後の指導による評価、課題レポート等の評価により総合的にこなう。				
事前・事後 学習の内容	毎回の実習前にはその回の計画をよく確認し、実習後には実習記録を書きながら十分な振り返りをおこなうこと。				
履修上の注意	他施設・機関等の協力により実施出来ることである。実習先に迷惑をかける態度は厳しく指導する。場合によっては実習中止になることもあるので注意すること。				
テキスト					
参考文献					